

令和5年度

Leadership Training for Teachers  
and Curators to Enhance  
Art Museum-based Learning

美術館を活用した  
鑑賞教育の充実のための  
指導者研修

2023年8月7日 - 8月8日



独立行政法人国立美術館

国立アートリサーチセンター

National Center for Art Research



はじめに

## より多くの子どもたちに、 美術館での学びの体験を



### 一條 彰子 Akiko Ichijo

2022年より国立アトリサーチセンターのラーニンググループリーダー。1998年～2022年まで、東京国立近代美術館にて教育普及を担当。本研修の立ち上げのほか、対話鑑賞を行なう解説ボランティアの育成・運営、鑑賞教材の開発、ビジネスパーソンや来日外国人に向けた有料鑑賞プログラムの実施などに携わる。

国立美術館が毎年行なっている鑑賞教育についての研修が今年も8月に開催され、全国の小・中・高等学校・特別支援学校の教員、指導主事、美術館学芸員あわせて77名が、大阪の国立国際美術館に集まりました。4年ぶりに新型コロナウイルスによる行動制限のない開催となります。

本研修は、独立行政法人国立美術館内に新しく発足した国立アトリサーチセンターが運営を継承し、これまでどおり各国立美術館と協力して実施します。また報告書も、研修に参加していない方にも内容が伝わるよう、体裁を一新してお届けします。

この研修は2006年に、学校と美術館の連携促進と、鑑賞教育にあたる教員や学芸員の人材育成を目的に始められました。当時の日本では鑑賞教育が目立ってはいなかったものの、まだひと握りの熱心な教員や学芸員がそれぞれの地域で孤軍奮闘しているという状況にありました。そのため研修は、全国から関係者が集まり、理論や方法などの知見を共有し、課題や解決の糸口を話し学び合う結束点（ハブ）となることを目指してプログラムが設計されました。

教員と学芸員が鑑賞体験を共有し、立場を超えてとことん話し合うために、最も時間をかけているのが、休館日の展示室で所蔵作品に向き合う「グループワーク」の時間です。現在でも受け継がれているこのグループワークに、今年は新たに特別支援教育をテーマにしたグループを加えました。特別支援学校の美術館活用は、子どもたちの障害の種類や程度に合わせた柔軟な対応が必要となります。まずは、連れていきたい学校と迎え入れたい美術館が、互いに状況を知り課題を見つけることから始め、今後も継続して取り組みたいと考えています。

研修修了者は18年間で約1700人になりました。中身の濃い2日間（当初5年間は3日間）の研修を体験された方々が全国で活躍し、その成果が地域に還元されていることが期待されます。実際、対話型鑑賞の普及や、学校の美術館活用、学習指導要領に基づいた授業やプログラムの実践に、本研修の果たした役割は少なくないと思われます。巻末に18年間の受講者アンケートをグラフで紹介したので、ご参照ください。今後も鑑賞教育は、社会包摂・多様性・ウェルビーイングなどの社会課題を学ぶ方法としても、ますます重要になることでしょう。

研修の開催と報告書の公開にあたり、ご協力を賜りました皆さまに、厚くお礼申し上げます。

# 事前アンケート

本研修の開催背景には、学校の先生方に、より美術館のコレクションや教育プログラムを積極的に活用してもらいたい、という願いや、全国の美術館の学芸員に教育現場と連携するためのヒントを持ち帰ってもらいたいという願いがあります。そこで、受講者に事前に回答していただいた質問事項から、学校や美術館の現場から見える課題意識や、研修への参加動機をご紹介します。

## 社会の変容に合った鑑賞教育ってなんだろう？

コロナ禍で芸術鑑賞会（美術以外も含む）が延期または中止となる年が多い。  
高校教員

デジタル教材の普及や感染症対策など、急激な変化への対応が求められる教育現場を、美術館側が意識する重要性を痛感している。教員の負担減の方向に寄り添いつつ、効果的な鑑賞プログラムを実施していくために、環境整備を進めることから取り組んでいきたい。  
学芸員

VRなどタブレット端末を活用した鑑賞授業を行なってみたい。  
小学校教員

芸術科の生徒ですら、美術館に足を運ぶ生徒が少ない。スマホ検索で完結するのではなく、実物を鑑賞すること、美術館に足を運ぶことの楽しさを感じてもらいたい。  
高校教員

一人一台端末や美術館を活用した鑑賞の授業の実践例が少なく、広がらない。  
指導主事

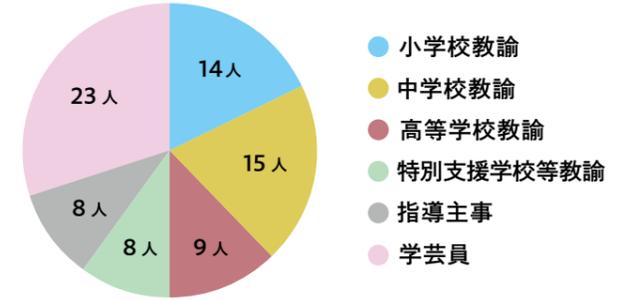
すべての子どもたちが  
鑑賞の機会を  
ありますか？

知的な障害のある子どもの鑑賞教育のあり方に課題を感じていた。  
学芸員

視覚障害があっても楽しく鑑賞を行ないたいが、作家の作品や美術館での鑑賞や連携についてどのような方法があるのか分からない。  
特別支援学校教員

重い知的障害と肢体不自由を併せ持つ生徒にとって、外界にふれ心が動く体験や、見たり感じたりする力を育むためのアプローチについて学びたい。  
特別支援学校教員

## 令和5年度受講者の内訳



学校と美術館が  
より連携していくには？

美術館活用が学校によって差がある。子どもの美術館活用頻度が低い。  
学芸員

美術館と連携するまでの連絡調整や時間の確保が難しい。複数学級ある場合、足並みをそろえて取り組むために鑑賞プログラムを薦めるが、意欲的な参加に繋がらないことが多い。  
小学校教員

小学校や中学校で美術館を活用した授業例は少ない。それぞれの市町村ごとに、独自の学習会等を開いているところもあるが、図画工作・美術を積極的に学びたいという教員は少ない。  
小学校教員

美術館が近隣になく、交通の事情等も踏まえ、どのようにしたら生徒に実物の作品に触れる機会を提供できるのかを知りたい。  
中学校教員

## 鑑賞の質をさらに高めるには？

鑑賞する対象が子どもの求めに応じたものになっているのか疑問に思う時がある。「近くに美術館があるから」という理由だけで鑑賞しても、子どもの求めとはずれてしまう。  
小学校教員

現在の社会を反映した、現代アートを取り入れた今を生きる美術を鑑賞題材として取り入れたい。今の社会の課題を一緒に考えていくことができる、アップデート可能な鑑賞を考えてみたい。  
指導主事

作品づくりを優先してしまい、有名な美術作品を鑑賞して思考する授業づくりができていない。  
中学校教員

「対話による鑑賞」の授業において、より深い鑑賞に導くための必要性を感じている。  
中学校教員

インスタレーション作品について、学校内で1画面のプロジェクターを使用しても作品のよさが伝わりにくい。  
高校教員

# 研修の流れ

Day 1 | 2023年8月7日

会場 国立国際美術館

## 9:50 - 10:10 開講式・オリエンテーション

挨拶：島 敦彦  
(国立国際美術館 館長)

司会：一條 彰子  
(国立アートリサーチセンター ラーニンググループ グループリーダー)



## 10:10 - 11:00 講演

「生活や社会の中の造形や美術、美術文化等と豊かに関わる資質・能力を育む鑑賞教育」

講師：平田 朝一

文化庁参事官(芸術文化担当) 付教科調査官  
文部科学省初等中等教育局教育課調査官  
国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官

まずは教育現場での  
鑑賞教育の意義と課題を知る



## 11:00 - 16:40 グループワーク



美術館の所蔵作品を用いた作品鑑賞のワークなどを通じて、作品にじっくりと向き合い、今後活用していくためのディスカッションを重ねる

## 16:50 - 18:00 グループワークの成果発表・講評



他の受講者の意見を取り入れて、自分の授業案やプログラム案をブラッシュアップする

Day 2 | 2023年8月8日

会場 大阪府立国際会議場

## 9:40 - 11:40 事例紹介

江原 貴美子 (港区弁小学校 図工専科教員)  
「出会いを紡ぐ」 —アーティストや美術館、大学、NPO等との連携を通して—

篠原 英里 (八戸市美術館 学芸員)

安田 真理子 (八戸市美術館 学校連携コーディネーター)  
「学校連携プロジェクトチームの取組」

高橋 智子 (静岡大学教育学部 准教授)  
「『つながり』を意識した鑑賞学習 —美術館と連携した知的障害等のある児童生徒との実践—」



「こんな実践例がある！」  
学校と美術館との連携の具体的な事例を知り、自身の活動に活かせるヒントを得る

## 12:40 - 13:30 講演 「創造性の根源としての鑑賞」

講師：神野 真吾 (千葉大学教育学部 准教授)

あらためて、鑑賞するとはどういうことだろう。  
創造性とどのように関係しているのだろう。  
いま一度、立ち戻って深く考える



## 13:45 - 15:30 ワールドカフェ



2日間の気づきと意見を他の人とシェアし、「この研修で何を学んだのか」を全員で振り返る

## 15:40 - 15:50 閉講式

## ツール紹介・用語解説

これからこの冊子を読み進めていただくと、いくつかの教育ツールの名前や用語が登場します。この研修への理解が深まるよう、このページでまとめて紹介します。

### 鑑賞教材

#### 「国立美術館アートカード・セット」

国立美術館が制作した、鑑賞学習のための教材です。「見る、考える」だけでなく「話す、聞く」という言語活動も取り入れて、楽しく鑑賞の基本を身につけます。

カード作品は、東京国立近代美術館、国立工芸館、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館の5館の所蔵作品から、子どもの対話がはずむ計65作品が選ばれています。学校の授業で、美術館訪問前の鑑賞の導入としても活用いただけます。



### 鑑賞素材 BOX

主に小学校から高等学校までの授業で活用されることを想定した、デジタル鑑賞教材です。国立美術館所蔵の名作を、高精細画像で電子黒板へ投影したり、タブレット端末へ配信したり、ワークシートを作成することができます。授業準備にあたっては、「図工・美術のキーワード」や「他教科へのひらがりキーワード」を使って作品を選ぶことができます。授業で活用するためのアイデア集も掲載しています。

詳細はこちら  
<https://box.artmuseums.go.jp/>



### 対話型鑑賞 (対話鑑賞)

一般的には、文字通り“複数人で作品を見ながら対話をしていく鑑賞”と認識されています。その源流となっているのは1980年代にニューヨーク近代美術館 (MoMA) で開発されたVTC (Visual Thinking Curriculum) という教育プログラムです。このVTCが1992年に「対話型鑑賞」と意識され、日本の美術館へ紹介されました。現在では「対話を通した鑑賞」「対話鑑賞」「対話による鑑賞」という様々な呼称も用いられながら、美術館にとどまらず、教育、医療、ビジネスパーソンなど多岐にわたる領域で応用されています。

対話型鑑賞は、1回で終わる作品鑑賞のスタイルや鑑賞法というイメージを持たれる方もいらっしゃるかもしれませんが、本来は継続的・連続的な教育プログラムです。言い換えれば、長期的な指導のカリキュラムがあったうえで、対象者の発達の段階などを念頭に置きながら作品を選定し、鑑賞する順番や組み合わせなどを考慮して展開していくことを前提に開発されています。



Leadership Training for Teachers and Curators  
to Enhance Art Museum-based Learning  
美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修

# Day 1

2023年8月7日  
会場：国立国際美術館

## Theme

# 生活や社会の中の造形や美術、美術文化等と豊かに関わる資質・能力を育む鑑賞教育



## Speaker

## 平田 朝一 Tomokazu Hirata

文化庁参事官（芸術文化担当）付教科調査官（併）  
文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官（併）  
国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官

1994年に岡山県の中学校で美術科教諭として赴任。その後2012年から岡山県総合教育センター教科教育部指導主事、2020年から岡山県内の中学校で指導教諭を務める。2006年の第1回目の指導者研修に参加し、10周年のシンポジウムの際は、岡山県の指導主事・指導者研修の過去の実践者として研修で学んだ成果を発表した。2021年より現職。

### 予測困難な時代の中で

今の子どもたちや、これから誕生する子どもたちが成人して社会で活躍する頃、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想されています。社会全体が直面する答えのない問いに立ち向かうためには、目の前の現実から課題を見つけ、創意工夫をしながら主体的に考え、多様な価値の人と協力しながら答えを導き出していくことが求められます。今日はこうした社会的背景を念頭におきながら、3つのポイントについてお話をいたします。

### (1) 学習指導要領改訂の趣旨を踏まえた授業づくり

小学校図画工作科は2020年度から、中学校美術科は2021年度に全面実施され、高等学校芸術科（美術、工芸）は2022年度から年次進行で改訂されています。今回の学習指導要領の改訂の具体的な方向性を次に紹介します。

- ・感性や想像力等を働かせて、**表現したり鑑賞したりする資質・能力を相互に関連させながら育成**できるよう、内容の改善を図る。
- ・**生活を美しく豊かにする造形や美術の働き、美術文化についての理解を深める**学習の充実を図る。
- ・高等学校芸術科（美術、工芸）において**表現と鑑賞の学習に共通に必要な資質・能力を【共通事項】**として示す。

小学校と中学校では、改訂の具体的な方向性として上の枠内の1つ目と2つ目の項目を示しています。高等学校では、これに加えて、3つ目の項目である【共通事項】が示されています。これらをもう一度確認し、充実していくことが大切です。



### 中学校美術科の目標

それでは、中学校美術科の目標を例に見てみます。小学校図画工作科、中学校美術科、高等学校芸術科（美術、工芸）の目標には、それぞれ「造形的な見方・考え方を働かせ」が示されています。今回の改訂では、造形的な視点を豊かに持って対象や事象を捉え、創造的に考えを巡らせる資質・能力の育成を重視しています。

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、**造形的な見方・考え方を働かせ**、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 対象や事象を捉える造形的な視点について理解するとともに、表現方法を創意工夫し、創造的に表すことができるようにする。
- (2) 造形的なよさや美しさ、表現の意図と工夫、美術の働きなどについて考え、主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。
- (3) 美術の創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を育み、感性を豊かにし、心豊かな生活を創造していく態度を養い、豊かな情操を培う。

造形的な見方・考え方とは、美術科の特質に応じた物事を捉える視点や考え方として、表現及び鑑賞の活動を通して、よさや美しさなどの価値や心情などを感じ取る力である感性や、想像力を働かせ、対象や事象を造形的な視点で捉え、自分としての意味や価値をつくりだすことが考えられます。また、造形的な視点とは、造形を豊かに捉える多様な視点であり、形や色彩、材料や光などの造形の要素に着目してそれらの働きを捉えたり、全体に着目して造形的な特徴などからイメージを捉えたりする視点のことです。

中学校美術科では、形や色彩、材料、光など、それぞれの造形の要素に視点を当て、自分の感じ方を大切に、温かさや軟らかさ、安らぎなどの性質や感情にもたらす効果などについて理解すること、造形的な特徴などから全体のイメージや作風などで大きく捉えるということについて理解すること、いわば「木を見る」と「森を見る」視点を大切にしてください。

## 指導計画の作成と内容の取扱い

授業改善を考える際に、学習指導要領の「教科の目標」や「各学年の目標及び内容」だけでなく、「指導計画の作成と内容の取扱い」についても確認してください。例えば、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善や、〔共通事項〕について配慮することなども示されています。また、表現と鑑賞の相互の関連を図ることや、美術館等との連携や活用などについても示されています。これらを確認して、ぜひ今後の授業改善に繋げてください。

## 「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善については、必ずしも1単位時間の授業の中で全てが実現されるものではありません。例えば、主体的に学習に取り組めるよう学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりして自身の学びや変容を自覚できる場面をどこに設定するか、対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面をどこに設定するか、学びの深まりをつくりだすために、生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるか、といった視点で授業改善を進めることが求められます。

その際、学びの深まりの鍵となる「造形的な見方・考え方を働かせること」を大事にしていきたいと思えます。また、「表現及び鑑賞に関する資質・能力を相互に関連させた学習の充実を図ること」も大切にしてください。ある中学校の授業では、**題材の最初に複数の作家の自画像を鑑賞し、生徒が作者の心情や表現の意図と工夫を考えることが、実際に自画像を表現する際に主題を生み出したり構想を練ったりする場面に繋がるようにしていました。**このように、表現と鑑賞は密接に関係していて、表現の学習が鑑賞に活かされ、鑑賞の学習が表現に活かされることで一層充実した創造活動に高まっていくことが考えられます。

## (2) 鑑賞授業の充実について

ある高等学校の鑑賞の授業を紹介します。まず、クラス全員で1点の美術作品を鑑賞し、作者の心情や表現の意図と工夫などについて対話を通してじっくり考えました。次に、数点の先輩の作品を、生徒一人ひとりが自己との対話を深めながらじっくりと鑑賞し、その後、グループで作品について自分が感じたことや考えたことを話し合いました。「〇〇さんはそう考えたんだね。自分とは全く違う視点で面白い。」など、異なる意見や新たな視点に気づき、さらにもう一度作品について考える時間が設定してありました。作者や作品を取り巻く背景についても考えるなど、対話を通して言葉で自分の考えが整理されている場面もありました。このように、それまでは漠然と見ていたことが整理され、美しさの要素が明確になり、さらに対話的な活動を通して言葉を使って他者と意見を交流することにより、自分1人では気づかなかった価値などに気づくことができるようになることが考えられます。

## (3) 美術館との連携について

もし、それぞれの学校において、美術館で子どもたちが実物の作品を見る機会を用意できるのであれば、先生方と学芸員の方とで事前に相談するなど連携を図ってください。美術館に行くことが難しい場合は、学芸員の方に作品やレプリカを持ってきていただくといったことも考えられます。その際、学校と美術館等が活動のねらいをお互いに共有しながら進めることが大切です。子どもたちが事前に学校で学習した内容や、どんなことを学ばせたいかを美術館側に伝えることで、美術館側から教材やプログラムの活用などの提案が得られることもあります。また、学校から美術館までの子どもたち移動方法をどのようにするのか、日程的なことなどについても考えていく必要もあるでしょう。前もって連携して準備を進めていただけたらと思います。

講演の際に使用されたスライド（抜粋）

「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善

小学校図画工作科

1 指導計画の作成に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

(1) 題材など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、児童の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようすること。その際、造形的な見方・考え方を働かせ、表現及び鑑賞に関する資質・能力を相互に関連させた学習の充実を図ること。

小学校  
図画工作

中学校美術科

1 指導計画の作成に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

(1) 題材など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようすること。その際、造形的な見方・考え方を働かせ、表現及び鑑賞に関する資質・能力を相互に関連させた学習の充実を図ること。

中学校  
美術

13

■美術館等との連携や活用

中学校  
美術

○連携については、生徒の鑑賞の活動をより豊かに展開していく観点から**学校と美術館等が活動のねらいをお互いに共有しながら推進することが大切**である。

美術館                      学校

## 様々な連携方法

埼玉県立近代美術館と連携した中学校の事例をご紹介します。まず生徒は美術室で材質や形の異なる椅子のスケッチをします。その後、学芸員の方に体育館にお越しいただき、生徒たちはグループに分かれて美術館からお借りした様々な形の椅子に座りました。座り方が分からないようなユニークな形の椅子が多く、生徒たちは思い思いに座り方を考案し、また体感して紙に気づいたことをまとめていきました。中には椅子の構造や強度に着目する生徒もいました。最後に学芸員の方に椅子の成り立ちや作者の意図についてお話していただきました。

このように学校に学芸員の方をお招きすることもできますし、学校と美術館をオンラインで繋ぐこともできるようになってきました。各地域で美術館と連携した教員研修も行なわれています。各美術館でも様々な鑑賞プログラムや鑑賞ツールが用意されるようになってきました。ぜひ今後は、各地域の美術館との連携に挑戦してみてください。

小学校図画工作の目標には「生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力を育成する」と示されています。また、中学校美術科の目標に「生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わるための能力を育成する」と示されています。先生方におかれましては、一人ひとりの生徒が自分との関わりの中で美術や美術文化を捉え、生活や社会と豊かに関わるができるように、今後の授業に取り組んでほしいと思います。小学校図画工作科の目標には「生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力」と示されています。高等学校芸術科（美術、工芸）においても確認してみてください。

最後になりましたが、今回の研修を通して、先生方が鑑賞授業の充実と、美術館の連携について考えて、今後の授業の改善に活かしていただけたらと思います。

# GROUP WORK



## グループワークの概要

1日目に行なわれたグループワークでは、約80名の受講者が10名程度のグループに分かれ、国立国際美術館の展示室内で実際に作品を鑑賞しながら「鑑賞教育とはどのようなものか」「自分たちの学校や現場でどのような教育プログラムをつくることができるか」を考えていきます。

各グループは、受講者のバックグラウンド（校種・経験年数・鑑賞プログラムの実施回数など）に応じて、小学生・中学生・高校生向けに想定するもの（計8つ）が設けられました。

過去の研修でも毎回必ず実施されてきたこのグループワークは、休館日の美術館展示室で行なわれるもので、国立美術館の所有する豊富なコレクションを活用しながら、授業やプログラムを想定したワークが展開できるという大きな特長を持っています。さらに本年度のグループワークで特筆すべき点は、特別支援学校の児童・生徒を対象にしたグループが設けられたことです。このグループでは美術館の空間的特徴（通路の広さや展示スペース）から考えられるアクセシビリティや、鑑賞する作品の選び方、そして教員や学芸員たちが配慮すべき事柄などがワークに盛り込まれました。他のグループでも受講者のニーズや特徴に応じた内容となっています。

各グループには鑑賞教育に関する知見と経験が豊かなファシリテーターがつき、受講者へ向けたプログラムを設計しました。また国立美術館各館の教育普及の職員が補助者として入り、事前のプログラム設計と当日の進行をサポートしました。

## 会場となった展覧会

1日目の会場となった国立国際美術館では、「コレクション1 80/90/00/10」展の展示室がグループワークの舞台となりました。同美術館が持つ1980年代から2010年代までの現代美術の所蔵品を幅広く展示する展覧会です。2022年に収蔵となった村上隆の絵画作品《727 FATMAN LITTLE BOY》（2017年）をはじめとした50点以上の作品が並ぶ会場で、受講者たちは研修1日目のグループワークを行ないました。

開講式で挨拶をした同美術館の島敦彦館長は、現代美術作品が鑑賞者に抱かせる「戸惑い」こそが鑑賞の糸口となる、と述べました。次のページからは、作品への戸惑いから出発し、作品や他の受講者と向き合いながら対話を繰り返し、思索を深めていったグループワークの記録をご紹介します。

渡邊グループ

アウトプットで気づく、  
対話的な鑑賞

[ 受講者：9名 ]



小学校教員 4名



学芸員 4名



指導主事 1名



ファシリテーター  
渡邊 美香

大阪教育大学 表現活動教育系 准教授。専門は美術教育。現代美術の教育における抽象表現の指導方法、教育における映像メディア表現題材についての研究を行なう。鑑賞教育の教材として、美術館訪問鑑賞教材「アートとともだち」(2019年)を作成。



補助者  
原 泉 (国立アートリサーチセンター)

このワークのねらい

このグループの受講者は、小学校教員(4)、学芸員(4)、指導主事(1)の9名であり、鑑賞授業の経験が比較的浅い方対象ということで、鑑賞活動を楽しむことに重点をおいた。対話やスケッチ、言語表現等につなげる活動を通して、作品をよく見るようにすることをねらいとし、加えて他者の考えを聞くことでより豊かな経験が生まれることを実感できるような内容とした。

【鑑賞した作品】

- ・アンディ・ウォーホル《グレムリンI-III》
- ・マイク・ケリー《シティ3-4, 7-1, 3-1, 13-1》(「カンドール」シリーズより)
- ・ロイ・リキテンスタイン《スイート・ドリームス、ベイビー!》
- ・村上隆《727 FATMAN LITTLE BOY》他

グループワークの流れ

- 1 自己紹介**  
自己紹介とともに、小学生を対象とした鑑賞授業で大切にしていることを話す。(写真1)
- 2 ワークシートの記入**  
これから学ぶアートについて「知っていること」「知りたいこと」をワークシートに記入し、発表する。
- 3 対話による鑑賞**  
アンディ・ウォーホル《グレムリンI-III》で対話型鑑賞を行なう。鑑賞後、ファシリテーターの対応について振り返る。
- 4 スケッチを通じた鑑賞**  
鉛筆・色鉛筆を用いてマイク・ケリー《シティ》シリーズ4作品をスケッチ鑑賞する。気に入った作品、角度、部分、材質などもシートに記入し、発表する。(写真2)
- 5 3行ポエムをつくる**  
同じエリアにある展示作品から1作品を選び、「3行ポエム」をつくり、発表する。(写真3)
- 6 ストーリーマップをつくる**  
同じエリアにある展示作品から1作品を選び、「ストーリーマップ」をつくり、発表する。
- 7 ディスカッション**  
これまでの活動や国立国際美術館の「アクティビティブック」を参照しつつ、各対象学年の子どもに対して「鑑賞を楽しむためにどのような活動の提案ができるか」を3組に分かれて話し合う。(写真4)
- 8 ワークシートを用いた振り返り**  
改めてアートについて「学んだこと」を記入しながら振り返り、発表する。



1



2



3



4

受講者の声

自分の思いを表現することにはじめはどんな言葉を使うとよいのか難しく感じていましたが、渡邊先生をはじめ、皆さんが受け止めてくださり、次はこう表現してみようかなと意欲を持って取り組ませていただきました。

同じグループの皆さんの視点が面白くて、交流することが楽しくて仕方なかったです。楽しい時間のあとは、その作品について深く知ろうとしている自分がいることに気づくこともできました。

対話型鑑賞は本で読んだことがあり、何回か自分の学級で試してみたいかなかった…という経験がただけでした。そのため、実際にやってみることができてよかったです。スケッチやストーリーを考える鑑賞方法も、実践してから、何のためにやるのか、どういった意味があるのかを解説してもらって分りやすかったです。

ファシリテーターの感想

熱意を持って語られる姿が印象的でした。

当初、初級者向け研修と考えていたのですが、話を聞くと実践経験は浅くとも自分自身が小・中学校で鑑賞授業を楽しんできたという受講者も多く、鑑賞活動を通して自分自身の見方や考えが広がり深まること、価値意識への理解が、受講者の皆さんの中に自然と浸透しているのが分かりました。グループワークでは、子ども一人ひとりの気づきを引き出す支援の大切さ、アウトプットの場の工夫について、熱意を持って語られる姿が印象的でした。



## ● 吉澤グループ

現代美術の鑑賞と  
美術館の活用について考える

[ 受講者：9名 ]



小学校教員 6名



学芸員 3名

ファシリテーター  
吉澤 菜摘

国立新美術館 学芸課 教育普及室長。京都府京都文化博物館勤務を経て、2006年より国立新美術館に入職。2007年に開館した同館において、教育普及担当としてアーティスト・ワークショップや建築ツアーの企画・運営、学校向けプログラムの実施、鑑賞ガイドブックの制作、インターンシップ事業等に携わる。

補助者  
宮下 咲 (国立新美術館)

## このワークのねらい

受講者9名のうち6名が小学校教員、2名が美術館学芸員、1名が教員経験のある学芸員で、勤務年数が少ない受講者もいたが、全員に鑑賞授業や学校向け鑑賞プログラムの実施経験があった。事前アンケートでは、課題として「学校／美術館との連携」を挙げる受講者が多数いたため、**学校と美術館それぞれが考える理想や課題を互いに共有する必要がある**と考え、教員と学芸員が直接意見を交わすことを最も重視してグループワークを企画した。また、**小学校の授業では避けられがちな、コンセプチュアルな現代美術作品の鑑賞**について、改めて体験し考える機会となればと思い、鑑賞対象には福田美蘭と森村泰昌の作品を選択した。

## 【鑑賞した作品】

- 福田美蘭《モノクロームで印刷された花の静物画》
- 森村泰昌《Blinded by the Light》



## グループワークの流れ

- 1 自己紹介**  
受講者の名前、選んだアートカード、好きな「○○」の3つの情報をもとに、他の受講者が、その人がどんな人なのかを想像して発言した後、本人による自己紹介を行なう。
- 2 対話による鑑賞 I**  
福田美蘭《モノクロームで印刷された花の静物画》を、ファシリテーターの進行により受講者全員で対話しながら鑑賞する。(写真1)
- 3 対話による鑑賞 II**  
受講者9名を、教員2名・学芸員1名で構成される3組に分けて、森村泰昌《Blinded by the Light》を鑑賞する。途中、ファシリテーターから作家と作品に関する情報を簡単に説明する。(写真2)
- 4 ディスカッション**  
引き続き3人組で、学校側が美術館に期待していることや、美術館側が提供できるリソースについて意見を交換した後、“美術館を活用した”鑑賞授業や学校向けプログラムを考案し、模造紙に書き出す。(左ページメイン写真)
- 5 まとめ**  
全員で集まり、各グループで話し合ったことを発表して共有する。最後に、感想などを付箋紙に書きとめ、1人ずつ発表する。(写真3、4)



## ファシリテーターの感想

## 「 修了生を継続的にサポートする環境を整えていくことの重要性 」

今回のグループワークでは、受講者の学校教員と学芸員が率直に話し合える場づくりを心掛けて、対話による作品鑑賞や、学校と美術館が連携した授業案に関するディスカッションを行ないました。グループワークを通じて、学校と美術館それぞれが考える理想や課題、強みをお互いに共有できたことで、両者の連携に対する期待と自信が生まれ、前向きで具体的な授業案の提案に繋がったと思います。各地域での学校と美術館のネットワークづくりなど、修了生の鑑賞教育活動を継続的にサポートする環境を整えていくことの重要性を、改めて確認する研修となりました。

## 受講者の声

講義の内容も非常に満足していますが、やはり対話を通じた学びにより、より多角的で刺激的な学びを得ることができました。皆さんの熱量に触れることで、今後の自分のエネルギーを充電できた気分になり、とても有意義な時間でした。

美術館活用という点でわずかな抵抗…のような感情がありましたが、学芸員の先生と気取らずに交流・意見交換できる場となりました。心の壁を取り払うことが研修のはじめにできて、ありがたかったです。

周りの先生たちの意見も勉強になったが、自分の意見を周りが受け入れてくれることに満足できました。こういうことか、と体験できたことをこれから、現場に伝えていきたいです。鑑賞するために向き合う時間を確保することの大切さも、自分が体験したこともよかったです。



## ● 中根グループ

## 美術館連携の課題共有から

[ 受講者：9名 ]



小学校教員 5名



学芸員 3名



指導主事 1名

ファシリテーター  
中根 誠一

世田谷区立瀬田小学校主任教諭。図画工作専科。八王子市立陶鎔小学校で「あそびじゅつかん」を発足（2019年～現在）。東京都教師道場2年目。Microsoft認定教育インベーター。美術による学び研究会会員。多摩教育の会「令和5年度 図画工作・美術教育の実技等研修講座」事例提案者。

補助者  
酒井 敦子（国立西洋美術館）

## このワークのねらい

受講者のほとんどが美術館連携授業の経験者であったため、冒頭に、美術館連携における課題共有から始めることとした。

ねらいは、それぞれの課題意識を明確にすることで、より主体的な研修参加を促し、鑑賞教育や美術館連携授業について多角的に捉えるためである。

グループワークの前半に、森千裕《お金の絵（猫が散財）》を、後半に、はまぐちさくらこ《きいろいにおいがやってくる》を選択し、どちらの作品も対話による鑑賞から、より多様な見方や感じ方を実感できると考えた。

## 【鑑賞した作品】

- ・森千裕《お金の絵（猫が散財）》
- ・はまぐちさくらこ《きいろいにおいがやってくる》
- ・会田誠《滝の絵》

## グループワークの流れ

- 1 自己紹介と課題意識の共有**  
受講者の自己紹介と、美術館と連携した授業について課題に感じていることを共有する。(写真1)
- 2 対話による鑑賞 I**  
ファシリテーターが指導者役、受講者が児童役となり、森千裕《お金の絵（猫が散財）》を鑑賞する。その後対話による鑑賞体験と発問や声掛けの意図を解説する。(写真2)
- 3 対話による鑑賞 II**  
ファシリテーターが指導者役、受講者が児童・生徒役となり、作品の音や季節、時間帯などに注目しながら会田誠《滝の絵》を鑑賞する。
- 4 小グループ編成**  
小グループ毎に、美術館連携授業についての課題意識を協議し、全体で発表する。(写真3)
- 5 対話による鑑賞 III**  
小グループ毎の代表者が指導者役、その他の受講者が児童・生徒役となり、はまぐちさくらこ《きいろいにおいがやってくる》を鑑賞する。小グループ毎に、多様な見方や感じ方を促す声かけを検討し実践する。その後、発表を通じて意見交換する。(写真4)
- 6 振り返りと感想発表**  
最後に、グループ全体でワークの振り返りとまとめを行なう。



1



2



3



4

## ファシリテーターの感想

さらに実りあるグループワークを提供することができるよう研鑽を積んでまいります。

本グループでは、受講者の皆さまに熱心にグループワークに取り組んでいただきました。今後、自身の立場でどのように鑑賞教育や美術館連携授業の課題に向き合っていくかを協議したり、国立国際美術館で本物の美術作品を前に、対話による鑑賞を実体験したりしました。

今回、本研修2度目のファシリテーターとして受講者の方々と交流し、全国の実践事例紹介を拝聴し、多くの学びの機会をいただいたことに感謝申し上げます。来年度は、さらに実りあるグループワークを提供することができるよう研鑽を積んでまいります。大変にありがとうございました。

## 受講者の声

鑑賞をする際の子どもたちへの声かけの仕方や、作品の情報を伝えるタイミングなど、2学期からすぐに活かせることをたくさん学ぶことができた。

各自治体の方とじっくりとお話できました。研修の早い段階でこのような機会があったことで、その後の時間もそのグループの方々と情報交換できたことがよかったです。

「作品自体は児童・生徒の鑑賞のねらいに沿ったものとしても、その作家や作品を子どもたちが検索した場合、ショッキングな内容が含まれている場合、伝えるべきかどうか」という点について悩んでいたため、グループワークで美術館、学校それぞれの立場から様々な意見を聞くことができ、非常に勉強になりました。

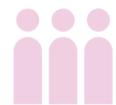
## ● 東良グループ

美術作品の文脈から鑑賞の意味や  
価値について考える

[ 受講者：10名 ]



中学校教員 5名



学芸員 3名



指導主事 2名

ファシリテーター  
東良 雅人

京都市教育委員会 京都市総合教育センター指導室長。  
京都市立芸術大学客員教授。  
2021年より文部科学省初等中等教育局 視学官。  
国立美術館教育普及に関する委員会委員 (2011年～2022年)。  
2023年より文化庁 文化芸術教育の充実・改善に向けた検討会議委員。  
2021年4月より現職。

補助者  
秋田 美緒 (国立西洋美術館)

## このワークのねらい

中学校の美術科担当教員及び教育委員会指導主事、美術館の教育普及担当等のグループであったことや、扱う作品がアラヤー・ラートチャムルーンスックの2つの作品と、西山美なコの《Looking at you》などの現代美術に属する作品であったことから、単なる形や色彩などの表面的な部分ではなく、作品の主題性に着目してその文脈を読み取り、作者の心情や創造性などに迫ることで作品を深く味わえるように試みた。また、作品の情報なども積極的に活用しながらさらに作者の内面や生き方を推し量ることで、見方や感じ方を深め、終盤では、参加者自身の活動を通じた今回の経験から、中学生が作品を鑑賞することの本質的な意味や価値はどこにあるのかなどについて考えた。

## 【鑑賞した作品】

- ・アラヤー・ラートチャムルーンスック  
《ルノワールの《ムーランド・ラ・ギャレット》とタイの村人たち》  
《ミレーの《落穂拾い》とタイの村人たち》
- ・西山美なコ  
《Looking at you》  
《ようこそあなたのシンデレラ・キッチュS》

## グループワークの流れ

- アイスブレイク、自己紹介**  
受講者たちの自己紹介と、これからのワークに向けたアイスブレイクを行なう。
- 作品を鑑賞する I**  
アラヤー・ラートチャムルーンスック《ルノワールの《ムーランド・ラ・ギャレット》とタイの村人たち》を鑑賞し、全体でディスカッションを行なう。
- 作品を鑑賞する II**  
同作家の《ミレーの《落穂拾い》とタイの村人たち》を鑑賞し、作者の2つの作品の文脈から「鑑賞という行為」とは何かについて考える。(写真1)
- 作品を鑑賞する III**  
西山美なコ《Looking at you》と《ようこそあなたのシンデレラ・キッチュS》を鑑賞し、全体でディスカッションを行なう。(写真2)
- 作品を鑑賞する IV**  
3つのグループに分かれて再度鑑賞し、「キッチュ」、「デステ」、「ピンク」、「見る側・見られる側」のキーワードをもとに各グループで作品の文脈について探る。
- グループディスカッション**  
午前と午後のグループワークでの経験から、「中学生にとって美術作品を鑑賞すること」や「美術館で鑑賞すること」の意味や価値について考え、それぞれのグループでまとめる。(写真3)
- 発表・共有、まとめ**  
グループ全体で、ワークの感想を共有し、まとめを行なう。(写真4)



## 受講者の声

「何が表現されているのか」ではなく  
「何を表現しようとしたのか」が鍵となる作品

今回、私がグループワークに選んだ2人の作家の作品は、美術館という空間にあることや、鑑賞という行為の中では「何が表現されているのか」ではなく「何を表現しようとしたのか」が鍵となる作品だったと思います。前半では、参加者に戸惑いが感じられましたが、後半になると、作品の表層ではなく、深層に触れることでの気づきが生まれてきました。今回の経験が、終盤での「中学生が鑑賞すること」とや、「美術館で鑑賞することについて」の意味や価値とは何かの問いに対して何らかの自分の答えを見つけることに繋がったとしたら嬉しい限りです。

普段見ているものがただよいな、美しいだけではなく、多面的に見ていくことが大切であるということが分かりました。貸し切られた美術館で多くの人と座って作品について歓談したりまとめたりすること自体が、なかなかできない体験だったので、それだけでも価値のあるものになりました。

10人というグループもとてもよかったです。その中で小グループをつかって少人数でも話し合いをたくさんすることができました。鑑賞した作品のチョイスもよかったです。難解な作品でしたが、鑑賞のしがいがありました。

前日は全く興味を持っていなかった作品と出会う新鮮さと刺激を感じました。時々、ファシリテーターから入るスパイスのような情報が話す内容を深めてくれました。

ファシリテーターの感想

## ● 道越グループ

自分の中に新たな価値をつくりだす  
鑑賞活動のあり方を考える

[ 受講者：10名 ]



中学校教員 5名

学芸員 4名

指導主事 1名

ファシリテーター  
道越 洋美

静岡県藤枝市立岡部中学校 教頭。  
藤枝市内公立小学校教諭、  
藤枝市内公立中学校教諭  
静岡大学教育学部附属島田中学校教諭  
静岡県教育委員会静岡教育事務所指導主事、  
を経て現職。  
国立美術館の教育普及事業等に関する委員会委員。

補助者  
鈴木 智香子  
(国立アートリサーチセンター)

## このワークのねらい

このグループの受講者は、鑑賞授業や教育普及活動の経験が豊富であり、鑑賞教育をさらに充実させようという意欲に溢れた中学校美術教員・学芸員・指導主事の計10名だった。ワークのねらいは、実際の作品と対峙しながら皆で対話を重ね、お互いの価値観を知ることで「自分の中に新たな価値をつくりだす」という美術科の本質的な学びを追求することとした。

加えて今回は、様々な表現形式があり、理解や解釈が難しいと捉えられることもある現代美術(とりわけ今回は村上隆や中原浩大)の作品を取り上げ、より質の高い授業やプログラム設計を検討する内容となっている。

## 【鑑賞した作品】

- ・村上隆《ポリリズム》
- ・中原浩大《レゴ》

## グループワークの流れ

## 1 グループワークの主旨とテーマ確認

- ・鑑賞教育の指導者として、鑑賞教育の意義や目的を明確にし、リーダーとしてどのような発信をしていくべきかを考える。
- ・エリア内の作品を自由に鑑賞し、自分が気になった作品を1つ選び、どのような部分に魅力を感じるのか、などを伝えながら自己紹介を行なう。

## 2 対話による鑑賞

- ・村上隆《ポリリズム》を全員で鑑賞し、ギャラリートークを行なう。
- ・初発の感想(直感的に感じたことや印象)や「はてな」を探して共有し、作品の主題は何かについてフリートークを行なう。
- ・村上隆についての情報を共有し、その中の情報で子どもに伝えたいことを考える。
- ・補助者が、村上隆についての解説を行なう。

## 3 小グループで鑑賞プログラムを考える

- ・3つの小グループに分かれて、グループごとにエリア内から作品から1つ選び、皆で授業展開を考える。
- ・子どもがどのように新たな価値を生み出すのか、子どもの思考の過程を大事にしながらつくる。
- ・お互いの授業を紹介しあいながらテーマに迫る。

## 4 振り返り

- ・最初のギャラリートークとの自分自身の深まりを考える。
- ・今後指導者として、どのように地元の学校(美術館)との繋がりを深めていけるのかを発表する。
- ・ファシリテーターから本日の研修を通してのまとめ。



## 受講者の声

実際の作品とそこに集う人々があって  
つくりだされる、貴重な経験

今回、現代アートのグループワークをどのように行なうのか、まだ見ぬ受講者の皆さんのお姿を想像し、かなり時間をかけて考えました。だからこそいつも以上にグループの皆さんとの出会いが鮮明に印象に残りました。そして受講者の皆さんと1日を過ごしてみて、その優れた見方・考え方や、これまで培ってこられた経験に支えられて、次々と新たな価値が生み出されました。この研修の素晴らしさは、実際の作品とそこに集う人々があってつくりだされる、貴重な経験であり、まさに美術科の本質的な学びであると思います。グループの皆さん、わくわくした時間をありがとうございました。

鑑賞が苦手だと思ふ背景には、「鑑賞=教師は作者の意図や時代背景を勉強し、分析された見解を子どもに正しく伝えること」のように捉えていたことがありました。今回、グループワークを行ない、鑑賞をする側(生徒側)として様々な考えの方との意見交換をすることが楽しく、新たな考えや知識から作品の見方が変わっていくことが充実感に繋がったと感じています。

自分が仕事の中で考えたプログラムの方向性が間違っていないことが確認できたが、知識の出し方やタイミング、解釈ということをどこまで子どもに求めてよいのか、現場での評価軸など、分からないことも色々残ったので、また今回出会った先生たちに相談してみたいです。

作品を皆で鑑賞し、1つの作品でも、様々な視点、考え方があることを改めて感じました。正解は1つではなく、話し合うことでより作品の理解が深まり、その過程にこそ、学びがあると実感しました。

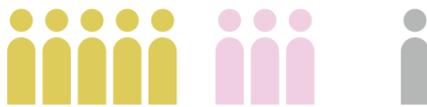
## ファシリテーターの感想



## 松永グループ

## 「美術鑑賞を通して学ぶこと」とは何か

[ 受講者：10名 ]



中学校教員 5名

学芸員 3名

指導主事 2名

ファシリテーター  
松永 かわり

世田谷区立砧南中学校 校長 都内公立中学校美術科教諭、東京都教育委員会指導主事、都内公立小学校副校長、東京都教育委員会統括指導主事、主任指導主事、教育政策担当課長を経て現職。国立美術館の教育普及事業等に関する委員会委員

補助者  
細谷 美宇 (東京国立近代美術館)

## このワークのねらい

経験豊富な中学校教員や指導主事、学芸員で、バランスよく構成されたチームだった。これまでも「美術館を活用した鑑賞教育」について何らかの関わりを持った方が多く、当日は自身の経験を踏まえながら、課題意識を持って研修に臨んでいた。グループワークでの経験が、日頃の取組や今後の活動にどう活かすことができるかを考えて、「美術鑑賞を通して何を学ぶのか」というテーマを設定した。テーマに深く迫ることができるよう、全体で考えを共有しながらの活動、1人でプログラムを考える時間、グループでの協議など、様々な形態での活動を計画した。

## 【鑑賞した作品】

・高松次郎《影》

## グループワークの流れ

## 1 グループワークの趣旨とテーマ確認

## 2 ギャラリートーク・ディスカッション

高松次郎《影》を用いて、全員で対話による鑑賞を体験する。(写真1)

また、作品に関する情報をHPや資料等から検索する。(スマホかタブレットを持参)

その後、以下のテーマについてディスカッションを行なう。

- ・この作品を中学生の授業で扱うとしたら、どのような展開が考えられるか。
- ・どのような発問が効果的で、どのような生徒の姿が想像できるか？
- ・情報を与える最適なタイミングとは？

## 3 個人での取組

エリア内の作品を1つ選定して、鑑賞プログラムを検討する。(写真2)

その際、以下のポイントに意識して取り組む。

- ・選んだ作品、選定の理由、対象学年、鑑賞の活動のねらい、ねらいに迫るための具体的な取組
- ・造形的な視点を働かせるための指導(発問)のポイント
- ・ICTの有効活用
- ・予想される生徒の反応等
- ・美術館との連携のポイントなどを記載するワークシートの活用方法

## 4 ディスカッション

以下のようなテーマを設け、全体でディスカッションを行なう。(写真3.4)

- ・作品鑑賞を通して学んでいるものとは何か？
- ・何のために、美術鑑賞をするのか？
- ・作品選びの考え方、鑑賞の能力とは？

## 5 まとめ



## ファシリテーターの感想

## なぜ、その作品を鑑賞するのか？

メイン作品である高松次郎《影》は、見る人に様々な問いを与えます。その人なりの「見方・考え方」を大切にしながら作品にアプローチできると考え、この作品を選びました。1人の時間を設けて作品を選定し、オリジナルのプログラムを考え、情報交換することで、「美術鑑賞を通して学ぶこととは何か」について迫っていきました。話題は「なぜ、その作品を鑑賞するのか」「どのように鑑賞するのか」といった内容にも繋がり、9月以降のそれぞれの取組に役立つ、活発な議論となりました。

## 受講者の声

学習指導要領の鑑賞のねらいを再確認しながら、鑑賞を行なう意味、それによって培われる力を考えたのもよい時間でした。鑑賞をやればよいのではなく、どのような力をつけさせたいか、ねらいを明確に据えて準備していきたいです。

オープンエンドで終わる従来のギャラリートークではなく、知識量やタイミングが学びを豊かに深めることについても話し合うことができました。

学校現場での展開に向けて学習指導要領を軸にワークを進めていただき、またワークの合間でやった作業の意味を概念的に振り返る時間を取っていただいたため、美術館の役割についても異なる目線から考え、意見を聞くことができましたように思います。またグループでの作業だけでなく、個人でしっかりと作品と向き合う時間があったことも自分の作品の見方や鑑賞で重視している点を省察する時間となりました。

## ● 星グループ

## 高校生の「見方や感じ方を深める鑑賞学習」で大切なことを考える

[ 受講者：10名 ]



高校教員 9名



指導主事 1名



ファシリテーター  
星 博人

福島県立会津学鳳中学校・高等学校 副校長。  
福島県立高等学校教員（美術）福島県教育センター指導主事。2013年度「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」参加。2016年度より国立美術館の教育普及事業等に関する委員会委員（美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修ファシリテーター）。高等学校学習指導要領【芸術（美術工芸）編 美術編】作成協力者。



補助者  
今井 陽子（国立工芸館）

### このワークのねらい

高等学校の教諭9名と指導主事1名のグループ。所属する学校環境が大きく異なる高等学校では、指導者自身が鑑賞の醍醐味を味わい、生徒の状況に応じて指導法を考へることが大切と考へ、受講者自身が意味や価値をつくりだし、見方や感じ方を深める活動を行なった。自我を確立し、自己の美意識や価値観を形成する時期とされる高校生の鑑賞学習における1つの提案としてのグループワークを目指した。高校生の鑑賞学習では、自己を見つめ、自分の生き方と比較する視点を持つことにより、自分なりの価値意識を育むことができると考へる。マーク・マンダースの《乾いた土の頭部》を課題作品とし、3つの大きな問いをもとに、参加した皆さんと対話しながら独自の解釈を深めた。

#### 【鑑賞した作品】

- ・奈良美智《長い長い長い夜》
- ・マーク・マンダース《乾いた土の頭部》



### グループワークの流れ

- 1 自己紹介  
奈良美智《長い長い長い夜》から連想する個人的なエピソードを述べながら自己紹介をする。
- 2 マーク・マンダース《乾いた土の頭部》の鑑賞  
グループ全体で対話を通じた鑑賞を行なう。(写真1.2)
  - 「事実」の視点の共有  
課題作品の形の特徴や細部の様子など事実（客観）の視点を全員で共有する。
  - 問いについて対話する I  
問い①「タイトルと素材から気づいたことは何か」について、感じたこと・考へたことを発表し、グループ全体へ対話によって共有する。
  - 問いについて対話する II  
問い②「18歳からずっと住んでいる建物とは何か」図版「調査のための居住」と「建物としての自画像」について書かれた文章から感じたこと・考へたことを話し合い、グループ内で作品について独自の解釈を目指す。
  - 問いについて対話する III  
問い③「もう1つの世界を生きる作者と私たちの共通点とは何か」作者のインタビュー記事を読んで感じたこと・考へたことを全員で共有する。(写真3)
- 3 鑑賞活動を振り返る  
鑑賞で大切なもの、大切にしたいことは何かについて話し合い、全員で共有する。
- 4 まとめ  
2組に分かれ、これまでの鑑賞活動をもとに「高校生にとっての鑑賞」「美術館を活用すること」を視点に大切なもの、大切にしたいことをまとめ、相互に発表する。



1



2



3



4

## ファシリテーターの感想

### 私たちの生活を振り返りながら大切にしている普遍的な価値を紡ぎ出す活動

マーク・マンダースの作品鑑賞を通して、参加された皆さんと作品の不思議さや作者の内面について考えるとともに、私たちの生活を振り返りながら大切にしている普遍的な価値を紡ぎ出す活動となりました。作品の特徴や印象などを自分の見方や感じ方を大切にしながら感じ取る活動と、表現の独自性や創造性、表現の意図に応じた素材の活かし方などを資料をもとに感じ取る活動を通して、皆さんとのことばの共有によって見方や感じ方を深めることができました。これらの活動が、受講された皆さんにとって鑑賞のあり方をさらに考えるきっかけとなれば幸いです。

### 受講者の声

1つの作品を午前、午後を通して鑑賞、話をする時間であったが、厭きるところか、もっと知りたい、と知的な好奇心がとどまることがないというすごい体験をしました。

素材が違い、具体的な着目点は違うものの、鑑賞のアプローチは日頃やってきたことと大きく違うわけではなく、改めて芸術鑑賞の根本は同じであることを認識できました。

これまで対話型鑑賞での成功体験がなく、手法について理解することができず、実感を伴って鑑賞の面白さを味わうことができました。

## ● 亀井・松山グループ

特別支援学校の  
児童・生徒との鑑賞を考える。

[ 受講者：10名 ]



特別支援学級等教員 7名 学芸員 3名

ファシリテーター  
亀井 幸子

徳島県立近代美術館 主席。徳島県公立学校の美術教員として聾学校、特別支援学校、工業高校、教育委員会等の勤務を経て2011年から美術館に勤務。教育普及担当として主に就学前施設を含む学校教育との連携事業やユニバーサル美術館事業に携る。

ファシリテーター  
松山 沙樹

京都国立近代美術館 学芸課 研究員。教育普及担当研究員として、学校連携や展覧会関連ワークショップなど多様な利用者や美術をつなぐ活動や、見える・見えないに関わらずともに楽しめるユニバーサルな鑑賞の可能性を探る「感覚をひらく」事業を担当。

補助者  
稲庭 彩和子  
(国立アートリサーチセンター)

## このワークのねらい

受講生は、特別支援学校の教員7名と美術館の学芸員やエドゥケーター3名である。先生方の経験年数も様々で、美術が専門の先生だけでなく特別支援教育や美術以外の教科が専門の先生もいる。関わる子どもたちの障害の重さや特性も多様であり、対象年齢も小学部から高等部まで幅広い。このようなことから、**受講生のこれまでの経験や日頃から感じていることなどを語り合い交流を図る中で、相互に学び合うことをねらいの1つとした。**

また、体験的な活動を通して、**様々な障害のある子どもたちとの活動を具体的にイメージしながら、子どもたちにとって楽しく豊かな学びが生まれるような鑑賞活動を考えていくことをねらいとした。**

## 【鑑賞した作品】

- ・奈良美智《長い長い長い夜》
- ・マーク・マンダース《乾いた土の頭部》

## グループワークの流れ

- 1 **アートカードを使った他己紹介**  
「国立美術館 アートカード・セット」を用いたアイスブレイクを行なう。(写真1)
- 2 **鑑賞あそび「勝手に審査員」**  
アートカードを用いたゲームを体験する。
- 3 **館内設備の見学とディスカッション**  
館内を歩き、エレベーターやトイレの場所や配置、点字ブロックの有無などを確認する。
- 4 **対話による鑑賞**  
マーク・マンダース《乾いた土の頭部》を囲み、対話による鑑賞を体験する。(写真2)
- 5 **美術館での活動についてのアイデア出し**  
模造紙にアイデアを貼り出し、それらのアイデアをもとに、グループをつくる。(写真3)
- 6 **小グループでの活動**  
3グループに分かれてより具体的な活動案を検討  
・身体を使って作品の表情やポーズを真似る活動(言語表現が難しい生徒との活動を想定)  
・「いいね！」からはじまる鑑賞/部屋に飾りたい作品探し(軽度の知的障害で言語活動が可能な生徒との活動を想定)  
・視点を変えてみる鑑賞(車いすなど、視点が固定されがちな生徒との活動を想定)
- 7 **アイデアの共有・体験会**  
奈良美智《長い長い長い夜》を鑑賞しながらアイデア共有。(写真4)
- 8 **振り返りとまとめ**  
グループ全体でワークの内容を振り返る。

顔の見える関係を築いて思いを伝え合うことが、  
連携に向けた大きな一歩になる

この研修は、貴重な交流の場でもあったと思います。施設設備の見学でも「このエレベーターでは車いす1台だから大勢で来たときは集合にも十分な時間が必要だね。」「点字ブロックがここで切れているから、どうすれば?」「トイレは?」等多くの視点や気づきがあり、それらに対する工夫や配慮にも話が及びました。様々なニーズを持つ子どもたちが安心して楽しく過ごせる美術館を目指すには、このような対話を重ねることが必要だと感じました。(亀井)

様々な背景や経験値、課題をお持ちの先生方が集い、身体を使う/身近なものや環境と作品を結びつけるなど、子どもたちが気軽に美術にふれるためのアイデアを共に考えることができました。最後に「美術館の人たちが『どうしたら(支援学校の生徒たちに)来てもらえるだろうか』と考えてくれていると分かって嬉しかった」という感想があったことも印象に残っています。皆さんと過ごすなかで、先生と学芸員とが顔の見える関係を築いて思いを伝え合うことが、連携に向けた大きな一歩になることを私自身改めて実感させていただきました。(松山)

ファシリテーターの感想

## 受講者の声

普段忙しいのが当たり前になっていて、当たり障りのない浅い思考止まりだったことに気づくことができました。

他県の話や美術館やギャラリーの方と一緒に考える機会が持てたことが貴重でした。3、4人の少人数の話し合いも話しやすかったです。

障害のある子どもたちの鑑賞について意見交換でき、大変意義深い経験でした。障害のある子どもたちを美術館として受け入れる際、どうしても構えてしまいがちでしたが、学校と連携しながら対応やケースを積み重ねることが大切だと思いました。

## グループワーク講評

研修初日、グループワークの後に参加者全員が集い、グループワークの成果発表とそれに対する講評が行われた。各グループから代表者が選出され、各グループのワークの内容や、学びや気づきのまとめが発表された。



Speaker

平田 朝一 Tomokazu Hirata

詳しいプロフィールはP.10を参照。



Speaker

神野 真吾 Shingo Jinno

千葉大学教育学部准教授。  
1993年東京藝術大学大学院終了、東京大学社会情報研究所（現情報学環）研究生を経て、1995年より山梨県立美術館学芸員として「現代美術百貨店」（2000年）、「新版日本の美術」展（2002年）などの現代美術展を企画。2006年より現職。WiCAN（千葉アートネットワーク・プロジェクト）を主宰。

**平田** 研修を受講された多くの方は今日の5時間で、ご自分の中に変化があったのではないかと思います。作品を鑑賞して感じ取ったり考えたりしたことが、他の方の考えを聞いてより深まっていったと思います。同様のことが子どもたちの中でも起こっていることが考えられます。

グループワークの発表や研修の様子を拝見して、感じたことを私から3つお話しします。まず、1つ目は、受講者の方が本物の美術作品を鑑賞して、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えて見方や感じ方を深めることができていたことです。作品から様々なことを感じ取って、一緒に鑑賞した方々から色々な考えや視点について気づかされたと思います。授業でも生徒たちから引き出していけると思います。2つ目は、先生方が、中学校や高等学校でより深く作品を鑑賞するために、必要な情報や視点を入れるかどうかにについて考えておられたことです。題材や作品、発達段階、今までの授業との関係から、子どもたちに合わせて考えていくことが必要でしょう。3つ目は、先生方が、振り返りで子どもたちの学びや発達段階などをしっかり考えられていたことです。

**鑑賞がどうすればより深まっていくのか、美術館と学校がどうやったら連携できるのかについて考えて、研修したことを各地域で活かしてください。**

今回は、はじめて特別支援学校の先生方のグループがありました。先ほどの成果発表にもありましたが、車椅子に座ったときの目線の高さや、点字ブロックの有無など、それぞれの子どもたちの障害によって適切なサポートは異なってきますが、美術館の施設についても考えていく必要がありますね。今回、学芸員の方も色々気づいたことが多かったようです。



各地域の美術館の中には、美術館で特別支援学校の子もたちが作品を鑑賞したり、学芸員の方が学校に出前授業に行ったりする事例もあります。本日まで参加された先生方の地域はどうか確認してみてください。

この研修を通して、今後、先生方が地域の美術館と繋がっていただけたらと思います。今日がその一歩になればと思います。今後、鑑賞がどうすればより深まっていくのか、美術館と学校がどうやったら連携できるのかについて考えて、研修したことを各地域で活かしてください。

**神野** グループワークでは皆さんとても活発に意見交換をされていたことに驚きました。また知識情報をどのように与えていくかについて意識しているグループや、美術館に来る体験そのものをテーマに議論するチームもあって興味深かったです。例えば海外ではビジターエクスペリエンスマネージャーという職種があり、来館者がどのような体験をするのかをマネージする職種が10年以上前からあります。イギリスのテート・モダンやヴィクトリア&アルバート博物館でも、展示会場内の作品に関する文字情報については、担当学芸員の文字解説がそのまま会場に出ることはありません。来場者がそれを見たときに、どのような体験になるかを考えてチェックされています。大事なことは来場者がどのような体験ができるのかです。それを第一に考えて、日本の美術館もどのような情報をどのように提供するの、組織体制やチェック体制を考えなければいけない時期がやってくるのではないかなど考えています。グループワークの成果発表で、美術館は敷居が高いという意見も出ました。これから先、日本は人口と共に税収も減るなかで、どうやって美術館を運営するか。そのときに市民のサポートが必要です。美術館は必要不可欠な施設だと多くの人たちに思ってもらうためにも、美術館での体験という観点から意識を変えていくことはすごく重要です。学校の先生方も含め、利用者側から美術館に対して率直に要望を伝えることも大事だと思いますし、寄せられた要望をどのように実現するかというところから新しい美術館像も出てくるかと思っています。

**これから先、日本は人口と共に税収も減るなかで、どうやって美術館を運営するか。美術館は必要不可欠な施設だと多くの人たちに思ってもらうためにも、利用者側から美術館に対して率直に要望を伝えることも大事だと思いますし、寄せられた要望をどのように実現するかというところから新しい美術館像も出てくるかと思っています。**

さて、今回の研修で展示されている1980-2010年代の作品を鑑賞教育の対象として選ぶ場合、思考の整理のために必要だと思った3つのポイントを挙げていきます。

### 引用について

1つめのポイントは引用です。例えば森村泰昌さんの《Blinded by the Light》では、ピーテル・ブリューゲルの《盲人の寓話》が引用されています。このように美術の過去の世界から引用することが1つ。それ以外にも、日常世界にある物を持ってくるのも引用です。学習指導要領には「色と形」という言葉が前面に出てきますが、ここで引用されるのは色や形だけではありません。美術作品は色と形だけで存在しているわけではありません。マルセル・デュシャンあるいはパブロ・ピカソのコラージュ作品以降にある

20世紀の美術は既製品を作品に使っていますが、色と形に加えて、物が元々の文脈で持っていた意味のうち、何が作品につけ加えられているのか。そこには子どもの発達段階に応じた対応が必要ですが、子どもたちにも十分に伝わっていますし、考えられることだと思います。引用の注意点としては、引用元と目の前の作品の比較ができないと意味が生じない場合もあります。そのことについては次の脱構築と合わせて話します。

*引用は美術の過去の世界から引用することが1つ。それ以外にも、日常世界にある物を持ってくるとも引用です。美術作品は色と形だけで存在しているわけではありません。色と形に加えて、物が元々の文脈で持っていた意味のうち、何が作品につけ加えられているのか。*

## 脱構築について

既存の構築されてきた「当たり前」を逸脱すること。それを脱構築と言います。脱は、壊す・脱臼する、抜けていくという意味です。現代思想として展開された脱構築が美術の中で流行したのが1980-1990年代でした。展示の中に中原浩大によるレゴを使った作品《レゴ》がありましたが、あれはまさに脱構築の作品です。「彫刻とはこうだ」という理解があった上で、それを玩具であるレゴを使って逸脱する抽象彫刻をつくったことが斬新だったわけです。ですので、子どもたちに「レゴ」だけを見せるよりは、他の何かと比較すると面白いですね。国際美術館には常設の彫刻作品としてヘンリー・ムーアの《ナイフ・エッジ》が常設展示されていますよね。ヘンリー・ムーアと中原浩大を比較したときに何が見えてくるのでしょうか。さらにはそこに両者の比較などもあってよいと思いました。

## 文脈を知る

3つ目のポイントは文脈です。アラヤー・ラートチャムルーンスックによる、〈ルノワールの《ムーラン・ド・ラ・ギャレット》と2008年タイの村人たち〉や〈ミレーの《落穂拾い》とタイの農民たち〉は、世界的にも非常に有名な作品のレプリカをタイのとある農村に設置し、村民がそれについて語る様子を撮影した作品です。この作品を見ると、人間は文脈を通して作品を価値づけしていくことがよく分かります。その文脈とは自分の知識によってつくられるものです。タイの農民たちは自分たちの日常の文脈からこれらの作品を見ようとしていました。これは子どもたちが美術鑑賞をする際にも同様だと思います。自分の限られた知識と経験からだけで作品を見ることに本当に意味があるのでしょうか？アラヤー作品を理解するためには、名画と価値づけられている《落穂拾い》の文脈を知らなければいけません。多くの方が画集や教科書などで一度は目にされたことがある《落穂拾い》ですが、この絵画は収穫物の分配にあずかれない農村に住む最下層の人々が、農作業が終わった後に落ちた穂を拾う権利が認められており、細々と命を繋ぐために落ちた穂を拾っている様子を描いた作品です。この事実を知らないと、牧歌的な田園風景の中の平和な働く姿に見えてしまうかもしれません。でも知っている、絵の後ろに描かれている大勢の作業する人々と、手前の3人との距離の意味が見えてきます。こうして知識が与えられることによって画面構成の意味まで考えることができるようになります。このように、知識や文脈を知ることが作品を理解する上で、かなり重要です。ですが、知識がなくても自分の日常から見出した何かと、作品の中の何か共通項があると思います。だからこそアラヤーは今のタイの農民にあの作品を見せたのかもしれない。知識は与えるor与えないの議論ではなく、どのタイミングで、どのような知識を与えるかが大事なのです。

*自分の限られた知識と経験からだけで作品を見ることに本当に意味があるのでしょうか？  
知識は与えるor与えないの議論ではなく、どのタイミングで、どのような知識を与えるかが大事です。*



学びとはその学びを通して、自分が社会や世界と関わり、1人で何かを成しうる、あるいは参加できるようにすることです。そのためにはその世界にどのような価値や課題があるのかをおさえていないと、学びのための学びになってしまうだろうと思います。どのような学びが得られるかを意識した上で、どのような知識を与えるのかはすごく大切で、1つの事例や1つの作品で成立するのではなく、それが他のものにも適応可能であるかを意識するとよいかと思います。

*学びとはその学びを通して、自分が社会や世界と関わり、1人で何かを成しうる、あるいは参加できるようにすること。そのためにはその世界にどのような価値や課題があるのかをおさえていないと、学びのための学びになります。*

また、知識を与えるタイミングについて。美術作品をより深く理解するというゴールが同じだったとしても、そこに至るプロセスが自分自身が生み出したものなら価値があると思います。つまり、作品を鑑賞して意見や感想を言葉にし、出た意見に対して正誤の答え合わせをしないことが重要ではなく、答えに至るプロセスが自分自身の実感を持ったプロセスとしてつくられているのかが大事だと思います。

*答え合わせをしないことが重要ではなく、答えに至るプロセスが自分自身の実感を持ったプロセスとしてつくれているかどうか。*

## 美術館のユーザーとして意見を持つ

私が今春に角川武蔵野ミュージアムで手がけた展覧会「タグコレ 現代アートはわからんね」では、知識をいかに与えるかについて新しい試みを行ないました。現代アートは文脈がないとわからないと言われていた割には会場に文字情報がない。それはどういうことなんだろう？と考え、文字情報を増やした展示を開催しました。とはいえ、情報として提示する文字情報が答え合わせにならないように色々と工夫しましたが、比較的好評でした。このことを考えると、ミュージアムはもっと見方を変えていいような気がしますし、またミュージアムを変えるきっかけになるのは使う人たちの要求・要望だと思います。皆さん自身が美術館というものがどういう施設だと考えるか。またこういうこともできるのではないか？あるいは、こうなってほしいという声をあげていくことも同時に重要ではないかなと思いました。



Leadership Training for Teachers and Curators  
to Enhance Art Museum-based Learning  
美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修

## Day 2

2023年8月8日  
会場：大阪府立国際会議場



## 公立小学校の事例

「出会いを紡ぐ」  
ーアーティストや美術館、大学、NPO 等との連携を通してー

Speaker

江原 貴美子 Kimiko Ehara

港区立筈小学校 図工専科教員  
30年以上前から東京都内の美術館や資料館、大学などの教育機関、NPO、寺院など地域にある様々なアートスペースと連携し、美術鑑賞を通じた授業を組み立て実践する。

## 小学1年生でも現代アートに出会う

これまで30年以上にわたって美術館などと連携し、鑑賞教育を行ってきました。私の勤務先は港区です。徒歩で行ける範囲に国立新美術館、森美術館、サントリー美術館また21\_21 DESIGN SIGHTといった国立や私立の美術館、そして企業のミュージアムなど、多くの施設があります。また屋内の施設だけではなく、六本木ヒルズ周辺には屋外に国内外の作家のパブリックアートがたくさんあります。私は「**「つくる」「見る」「描く」ための力は1年生から育みたい**」と思い、毎年1年生の図工の授業では、徒歩で地域のアートを楽しむ「アートさんぽ」という授業を行ってきました。**子どもたちは作品の大きさをすぐそばで確かめ、様々な角度から作品を眺めるなどして、いつも様々な発見をして驚かされます。「見る」ということは、本当に楽しいことです。美術館に行く前には、「大きな声を出したり、走ったりしないお約束ですよ」と言って引率しますが、小学2年生と21\_21 DESIGN SIGHTで開催されたデザイン「あ」展を鑑賞した時のことです。最初の展示室で壁に映し出された映像を見た途端、その空間が楽しくて子どもたち全員が歌って踊っていた、ということもありました。子どもたちの感性と反応に私自身も「見る」ということが覆されたできごとでもありました。**

## 工芸を通して日本の伝統に触れる

サントリー美術館は2007年に現在の場所に移転されてから「新しい教育普及をつくる」ということでずっと一緒に授業を行ってきました。2017年には修復を終えた国宝《浮線綾螺鈿蒔絵手箱》を見に行きました。**そして蒔絵の人間国宝である漆芸家、室瀬和美さんを学校にお招きし、鎌倉時代の作品がどのように修復されるのかについてお話を伺いました。「1つ作品を新しくつくと、1つ修復するんだよ。そうやって過去を繋いでいくなだよ」と貴重なお話も伺いました。**また私の勤務する学校は非常に多国籍ですので日本語を学ぶ通級学校があります。この通級学校では伊勢半本店の紅ミュージアムの方にお越しいただき、異学年の子どもたちがグループになって、紅花を手で絞り、布を染める授業を行ないました。紅花に含まれる赤い色素はたった1%。そのとても貴重な色素を使い、様々な国籍の子どもたちが日本古来の美しい赤色を体験しました。

## 離れていても世界と繋がる

コロナ禍の連携授業についてもお話しします。2020から21年にかけて、森美術館の「MAMプロジェクト」の一環でコロンビア出身のオスカー・ムリーリョさんが世界各地で行っている「フリクエンシーズ」というプロジェクトに参加しました。**美術館に行くのではなく、キャンバスを張った画板を子どもたちに配布し、子どもたちが学校で図工の時間だけでなく、自由に絵を描くことを通して自らの痕跡をキャンバスに重ねていくというプロジェクトです。**当初アーティストは来日予定でしたが、来られなくなってしまっ



たためビデオメッセージを通してアーティストと出会いました。できあがったキャンバスには付箋をつけて感想を書き、対話して、考えや思いを共有しました。そしてできあがった作品は森美術館内の一室で展示していただきました。子どもたちは自分たちのキャンバスが世界にも同じようにわたっていく、ということを感じました。

また2017年には同じく森美術館のラーニングプロジェクトの一環でメキシコのペドロ・レイエスさんを学校にお招きし、校庭に植樹をしました。ペドロさんはメキシコの銃社会を変えるために市民から銃を集め、それをシャベルに加工し、シャベルを使って木を植える「銃をシャベルに」というプロジェクトをされており、日本では初めての植樹となりました。ペドロさんから**「アートにはマイナスをプラスに変える力があるんだ」**というお話を伺いました。

このように美術館等と連携した授業を長年続けてきましたが、私はいつも今、この瞬間から、この場から、かけがえのないあなたと授業をつかっていきたいと思っています。「あなた」は、子どもたちはもちろんですが、学芸員の皆さまや同僚そして理解ある管理職の先生のことです。これからも出会いを大切に紡いで未来をつかっていきたいと思っています。

## 質疑応答

## Q1 美術館との連携授業を始めたきっかけを教えてください。

私は目黒区民で、30年にわたってボランティア活動を通して目黒区美術館と関わりがありました。その教育普及の活動と地域連携の取組が素晴らしく、ここに子どもたちを連れて行きたいと心底思ったことがきっかけです。

## Q2 美術館を訪れる前の事前の準備はどのようにされていますか？

同じ学年の同僚と一緒に必ず現地に行って、担当学芸員の方とお話しします。しおりを作成し、保護者と区に連絡するなどの手続きも行ないます。ただ事後学習はいつも感想等を書かせるというわけではありません。美術鑑賞という体験は子どもたちが生涯にわたって何かを判断する際の勇気や心の血肉としてどこかに入っていると考えています。

## Q3 学年に応じた作品や展示マッチングはどのように行ないますか？

「この学年だからこれは早い」という考えはありません。小学1年生でも現代美術を見に行きますし、工芸を見に行くこともあります。6年間を通して様々なジャンルを横断することを大切に考えています。

小・中・高を対象にした八戸市美術館の事例

## 学校連携プロジェクトチームの取組

## Speaker



## 篠原 英里

Eri Shinohara

八戸市美術館学芸員  
2016年から八戸市美術館で学芸員として勤務。新美術館整備期間中の2017-2021年は八戸市新美術館建設推進室に所属。



## 安田 真理子

Mariko Yasuda

八戸市美術館学校連携コーディネーター。  
2022年度まで八戸市中学校教育研究会美術教育研究会会長/八戸市立三条中学校校長として勤務。  
2023年4月から現職。

## プロジェクトチームの発足背景

**篠原** 八戸市美術館は1986年に開館、市民の要望や建物の老朽化を受けて建て替え、2021年に再開館しました。建築というハード面だけではなく、ソフト面も再考し「種を蒔き、人を育み、100年後の八戸を創造する美術館～出会いと学びのアートファーム～」というビジョンを掲げました。美術館から創造的な行為が生まれ、それが人を育みやがて地域を育むというビジョンです。このビジョンのもと、より深く創造的な学びの場を生み出すため、教員や美術館スタッフなどの「人」が繋がり、「共に」取り組むことを重視しました。そして学校、美術館、専門家をメンバーとする学校連携プロジェクトチームが発足しました。運営の事務局は八戸市美術館で、校種ごとに声がけをして集まったメンバーが活動しています。2023年度は小学校教員9名、中学校教員5名、高校教員3名、美術館スタッフ3名、武蔵野美術大学の三澤一実教授に専門家として参加していただき、合計21名のメンバーで活動しています。チームの目的はたくさんあります。アートを通した学びの実践と研究、学校・美術館で抱える課題の検証、プログラムツールの開発、美術館で様々な人と繋がることなどです。年に4回程度全体会議を開催し、プロジェクトのアイデア出しや美術教育の情報事例の共有、対話型鑑賞の練習などを行ってきました。

## プロジェクトチームの取組事例

**安田** 全体会議で出たアイデアをプロジェクト化してこれまで4つの活動を行ないました。まず「大きな絵」というプロジェクトでは小・中・高の6校から生徒を約35名募り、共同で1つの大きな絵を制作しました。そして2つ目は「同じテーマで作品づくり」。小・中・高の6校から児童・生徒を募り、「こころ」をテーマに新聞紙で作品をつくり、完成した作品は、グループごとに鑑賞会をした後、美術館に展示しました。小学生は自分の体験に基づいたことを表現している一方で高校生は心の奥を表現している抽象的な作品が多かったので、ブラックキューブという暗い部屋を使い、照明を工夫した展示を行いました。そして3つ目は「美術館新聞部」の活動です。高校生と小学生が参加して「とれたて!すま〜と!」を発行しています。コロナ禍でもZoomを活用して美術館のロゴを作成したデザイナーにインタビューをしたり、美術館新聞部の公式キャラクターを作成したりして新聞を発行し、現在も活動が続いています。

**篠原** 4つ目の活動である「小中高合同鑑賞会」では、青森県出身の漫画家 馬場のぼるを紹介する展覧会「まるごと馬場のぼる展 描いた つくった 楽しんだ ニャゴ!」の鑑賞会を小中高混合で行いました。プロジェクトチームメンバーの先生が所属する各学校で参加希望の児童・生徒を募集し、チーム分けや当日の流れを事前に検討。美術館から学校へは協力依頼文を送付しました。鑑賞会当日は小中高生混合で1グループ5~6名で2グループになり、自己紹介をした後、グループ対抗でカルタを行いました。うちとけた後に担当学芸員が展覧会をひと通り案内し、各自で作品を鑑賞してお気に入りの作品を1つ選びました。最後は、



グループに分かれて自分が選んだ作品とその理由を発表し、それについてグループ内で自由に質問して鑑賞を深める時間を設けました。異年齢が交流することで、**高校生が小学生を自然とサポートする体制ができていましたし、先生にとっては、自分とは異なる指導方法に触れて学ぶ機会になりました。**

**安田** 近年は学校と美術館との距離が縮まり、社会科見学として美術館に訪れる学校も増えてきており、美術館活用の幅が広がっていると感じています。また、今年度は展覧会に出展したアーティストによる出張ワークショップを小学校3校で開催し、お面制作を行ないました。ワークショップ後お面は展示室に飾られ、作品の一部になりました。その後、学校で見学に来たり、夏休みを利用して家族と一緒に来たりと美術館に足を運ぶきっかけになりました。

昨今は学校現場の多忙化や美術教員の減少など様々な課題があります。こうした中で造形教育に興味を持ってもらうために、美術館内に誰でも見学できる活動拠点の学校連携ラボを設置する予定です。また、美術鑑賞を専科の先生に頼るのではなく、学級担任などの先生を取り込み、「**朝鑑賞**」を推進したいと考えています。**主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、美術館を活用した取組を進めていきたいと考えています。**

## 質疑応答

## Q1 小中高による合同鑑賞会は平日に行ないましたか?また参加したのは希望者のみですか?

プロジェクトチームの先生たちが所属している学年や生徒に呼びかけて、希望者を引率し、学校の授業外の活動として夏休みに行ないました。

## Q2 プロジェクトチームの結成は美術館が主体となって募集したのでしょうか?

美術館が主導し、多くの方の協力を得て募集しました。学校との連携を強化するために教育委員会の方にも入っていただき、まずはワーキング会議を開きました。そこからプロジェクトチームを結成しようというアイデアが生まれ、小中高の図工研究会や美術教育研究会の会長に、先生方が参加しやすい曜日や時間帯などを相談しました。また会長から各学校に呼びかけていただき、参加したいと手を挙げていただいた先生とチームを結成しました。

## インクルーシブの事例

「つながり」を意識した鑑賞学習  
—美術館と連携した知的障害等のある児童生徒との実践—

Speaker

## 高橋 智子 Tomoko Takahashi

静岡大学教育学部准教授。病弱・身体虚弱教育における造形プログラムの開発や、他教科との連携による学校教員養成課程の授業改善に関する研究を行なう。静岡大学教育学部附属特別支援学校をはじめ、現場の教員と連携した教材開発及び授業実施などにも取り組む。

## 共生社会に向けて

今日、共生社会やインクルージョン、ダイバーシティという言葉をよく耳にされると思います。『『共生社会とは』(中略)誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会である。このような社会を目指すことは、我が国においても最も積極的に取り組むべき重要な課題である』<sup>\*1</sup>とされています。学校教育や社会の中で、こうした力を持った子どもたちを育ていきたいと思いますが、学校教育に関しては「**障害のある子どもと障害のない子どもが、できるだけ同じ場で共に学ぶことを目指すべきである。**その場合には、それぞれの子どもが、授業内容が分かり学習活動に参加している実感・達成感を持ちながら、充実した時間を過ごしつつ、**生きる力を身に付けていけるかどうか、これが最も本質的な視点であり、そのための環境整備が必要である**」<sup>\*2</sup>とされます。ここに関しては、なかなか難しい面もあるかと思いますが、**アートを手段にすると、こうしたハードルを超えていけるのではないかと思います。**しかし、障害のある子どもたちを取り巻く実態はどうでしょうか。

## どのように美術に関心を持たせるか

平成30年に障害者による文化芸術活動の推進に関する法律が制定されました。文化庁等の調査<sup>\*3</sup>によると、文化芸術を直接鑑賞した障害のある人の割合は世論調査と比較して低く、過去1年間に文化芸術を鑑賞しなかった一番の理由は「関心がないから」でした。世論的には障害者の芸術が注目されている一方で、美術館に行くことが難しい状況にある子どもたちに、**美術の経験と出会い、そこから得る気づきをどうコーディネートしていくのかは課題です。**障害のある方が1人で美術館へ行くことは難しいかもしれませんが。そのような状況でどのようにハード面、ソフト面からアプローチできるでしょうか。そこで学校教育が重要になってきます。その際に「つながり」を意識した鑑賞学習が非常に大事だと考えています。つながりは美術館と学校だけでなく、表現と鑑賞のつながり、そして人のつながり、または他教科とのつながりといった様々なつながりを考えながら題材を構想していかなければなりません。

## 諸感覚をはたらかせる美術鑑賞

大学と静岡県立美術館、静岡大学教育学部附属特別支援学校の高等部と連携して行なった授業例をご紹介します。美術科と家庭科の連続した授業を行ないました。伝統文化を共通の題材にして、まずは美術科の授業で屏風(レプリカ)を鑑賞します。次に、家庭科の授業として屏風の前で和菓子の「練りきり」を鑑賞後に食べるという活動に取り組みました。障害のある子どもにとって体験することは非常に重要ですので、**諸感覚を働かせながら、見る、体を動かす、味わう、匂いや温度を感じることを大切にしました。**授業で工夫した点は鑑賞する環境を和室にしたこと。屏風を鑑賞するにあたっては、屏風を展示する様子に興味を持ったり、近づいて鑑賞したりする様子が見られました。学芸員さんとは対面の打ち合わせを実践前と当日の2回行い、生徒の実態や学習目標および内容、学習方法について情報共有を行ないました。ま



た、事前に特別支援学校の教員と生徒で事前学習に取り組みました。実践では、両教科ともに体験的な活動を主とし、学習方法には対話による指導を共通に位置づけるようにしました。

授業から3ヶ月を経てアンケートを実施しましたが、事前調査で示された色や形に着目するという視覚優位の視点から、新たに屏風の機能性や物語性、屏風の鑑賞方法などに着目しており、作品に対して多角的な視点や興味関心が高まっている様子が見られました。さらに、授業後に様々な人と鑑賞体験について話したり、美術館での鑑賞に意欲的になっていたりする様子が確認できたことも印象的でした。

**知的障害のある生徒の学習上の特性として、学習によって得た知識や技能が断片的になりやすいことがあげられます。そのため様々な学びの関連性、連続性を意識したいと考えています。**学習目標や内容、方法、テーマ、題材や教科、地域の他機関、生徒の暮らしや生活とのつながりです。例えば、日本の豊かな文化の発展は季節や地域との関連が強いですし、季節をテーマにした学習内容は様々な教科で扱われます。また、生徒は学校内外の様々な場所で体験的に季節を楽しんだり感じたりしています。美術を通じた体験的な学びは、他教科や美術館等とのつながりを意識することで、さらに充実したものとなり、生徒の暮らしや生活につながるような豊かな学びとなると考えます。

※1、2 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)概要 平成24年7月23日初等中等教育分科会より

※3 文化庁「障害者の文化芸術の鑑賞活動及び創作活動実態調査—結果の概要—」平成29年、内閣府「文化に関する世論調査」平成28年より

## 質疑応答

**Q1 高橋先生が呼びかける形で他の先生と協働で授業を行なったのでしょうか?また支援学校の先生はどのような反応でしたか?**

今回の実践では、まず同僚の家庭科の教員に両教科が連携した授業づくりについて相談しました。次に特別支援学校の先生方にも相談し、興味を持っていただきました。きっかけはこちらからの声掛けだったとしても、共に実践することで連携する魅力を感じ協力してくださる先生方が多いです。

**Q2 支援学級の子どもたちを美術館に連れて行きたいのですが、過去に実現できないことがありました。どうアクセスすればいいでしょうか?**

美術館の方からは「受け入れたいがどのように対応すればいいかわからない」という声も聞いたことがあります。例えば新しい空間でパニックになる子もいますね。その場合はクールダウンできる部屋を準備してほしい、など具体的な懸念点とリクエストを事前に1つずつ共有することで実現していくと思います。

## Theme

## 創造性の根源としての鑑賞

## Speaker

## 神野 真吾 Shingo Jinno

千葉大学教育学部准教授。  
詳しいプロフィールはP.32を参照。

## 「鑑賞」と「Art appreciation」の違い

鑑賞という言葉英語に訳すと appreciation です。しかし英語の appreciation には「鑑賞」と「批評」という2つの意味があります。アート鑑賞の際に「この作品はどんな意味があると思う？」と問いかけてみますが、これは「あなたはこの作品をどのように価値づけし、意味づけますか？」という意味です。そして批評とは「私」が行なう主体的な行為です。

一方で日本語の「鑑賞」には「鑑」= 模範とすべきもの、「賞」= 愛でる、味わうという意味があります。よいとされているものを理解し、味わうというニュアンスです。このとき、世間でよいと評価されているものと、自分がよいと思うものが一致する場合もあれば、そうでない場合もあります。

## 芸術を教育の基礎とするべきである

イギリス人美術批評家ハーバート・リードの『芸術による教育』の第一章に「芸術を教育の基礎とするべきである」とあります。そして「人は、その人自身になるように教育されるべきである（中略）人は、その人自身でないものになるように教育されるべきである」と書かれています。つまり、前者は自分自身が何を大事にしているのかという自分自身を知り、自分自身を主張していくこと。自分の中に生じたものを価値づけていき、それが自分自身になっていく「学び」を指すと考えられます。これは「appreciation= 意味生成の学び」です。そして後者は自分の中にはなかった価値観を、美術鑑賞や何かを制作することで学んでいくということで、これは「文化の学び」だと言えます。この2つの違いをしっかりと意識していただきたいと思います。しかし、この2つは分離しているわけではなくて、他者の文化に触れて、自ら新たな意味や価値の生成を行なう場合もあり、相互に影響し合うものでもあります。

## 鑑賞教育の重要性

元来、美術館を含む博物館は社会教育のための施設という位置づけでした。2017年に文化芸術基本法が公布・執行されましたが、その背景には「少子高齢化・グローバル化の進展など社会の状況が著しく変化する中で、観光やまちづくり、国際交流等幅広い関連分野との連携を視野に入れた総合的な文化芸術政策の展開が、（中略）より一層求められるようになってきました」と記されています。その際に必要となるのが先ほどの「art appreciation（意味生成）」の学びです。「鑑賞」の方はすでにある価値を学ぶ側面が強いですが、「art appreciation」は新しいものを生み出していくことと深く関わっています。岡本太郎さんが「なんだこれはっ！ってというようなものに、パーッとぶつかっていくのが芸術よ」と語っていますが、自分にとってよくわからないが、強い刺激が与えられるもの。芸術はそういうパワーを持っているということです。

一般的に教育では、効率よく生きるために必要な「概念」を増やしていきます。フランスの哲学者ジル・ドゥルーズは「人間は考えたくない動物だ」と言っていますが、つまりある程度の知識や概念を身につけてしまえば、人間はそれを使いこなせばうまくやっていけるのです。でもそれだと新しい発見はなかなか起きなくなってきました。概念を持つ人間が新しい発見をし、考えるのは、ショックを受ける時なのです。



いわゆる美的体験や崇高体験はショックに括ってよいものだと思います。そこで「鑑賞」が大事になってきます。「対話型鑑賞で目の前の絵で発見したものを何でもいいから言ってみて」と問いかけてみますね。自分には分かったものやこととして概念で処理してしまいがちなので、実際にはよく見ていないということがよくあります。私たちが美術館の作品の前に、どういうプログラムをつくらうかというときには、このショック、つまり「なんだこれは」という機会をつくることのできるかが非常に大事なのです。

## デザインシンキングから美術鑑賞を考える

近年よく耳にするデザインシンキングとはスタンフォード大学のデビッド・ケリー教授があらゆる人の創造への道を拓くために開発した方法論です。まず課題を発見して、その後は「共感」「定義づけ」「アイデア出し」「プロトタイプをつくる」「テストしてみる」というプロセスを通して、人間中心のデザインを生み出していきます。スタンフォード大学には学生や社会人が受講できるd.schoolがありますが、その中でこのプロセスを幼稚園から高校までの教育に活かすためのK12というプロジェクトが実践されています。色々なカリキュラムの1つに「Observation vs Interpretation」（観察と解釈）というテーマがあります。見たものについて述べることで、それを解釈することの違いを理解しようという内容です。自分が世界を見る力を知ることは、ユーザー目線に立ち、効果的なアイデアをデザインする上でとても重要です。1.観察→2.解釈→3.ニーズは何か→4.アイデアを考えるというプロセスがありますが、この1、2は、先ほどの「鑑賞教育」と重なります。

美術鑑賞との関係を考えてみると、E・パフノスキーという美術史家が作品解釈の3段階として「自然的主題」、「慣習的主題」、「本質的意味・内容」を提唱しています。「自然的主題」は見えたままの意味。「慣習的主題」文化的な文脈を参照しつつ見ることによって、その絵が「何を描いているか」を知る解釈方法。「本質的意味・内容」は1つの作品の中に限定される主題、意味を越えた、その背後に控える様々な文化的傾向の1つの現れであるところの意味です。美術史を学ぶ上での最初のトレーニングの1つ「ディスクリプション」（描写をする）は先ほどのデザインシンキングの最初のプロセスと同じです。作品について自分の考えをまとめるには視覚的に感じたこと、客観的視覚情報と知識情報の関連づけを行ない、私たちはそこに意味を生じさせています。そしてその先に個々人の行動が生じ、それは主体的な創造、表現行為だと言えることができるでしょう。美術作品を鑑賞するときだけではなく、このプロセスは自分の周りの生活空間に目を向けたときにも生じるはずで、色んなものが見えてきて、色々なことを感じ、解釈が生じて、意見を発言したり、文章化したり、あるいは社会の中でこういうものをつくりたいという行動にも繋がってきます。このように鑑賞の学びは新しい何かを生み出す上で、根源的な存在として重要であると言えます。

# ワールドカフェ

約100名の参加者が  
20分間の対話を繰り返し、考えを深めた

ワールドカフェとは、参加者全体を少人数のグループに分け、各テーブルでメンバーを入れ替えて複数回シャッフルしながら対話を深める議論の手法のことです。

今回のワールドカフェでは、受講者、講師、国立美術館の学芸員など約100名が4名ずつのテーブルに分かれて、2つのテーマについて対話を行いました。得られたアイデアはテーブルの真ん中に置かれた模造紙に書き込めるようになっていました。

20分ほど経過したら、1人がホストとしてテーブルに残り、他の人はミツパチが花の花粉を集めに行くように他のテーブルへ席を替えていきます。この方法により、100名近い参加者ができるだけ多くの人とフラットに話せる機会が生まれました。

また、会場では司会の一條彰子から次のような「マナー」が共有されました。

## ワールドカフェのマナー

- テーマに集中して話し合しましょう
- 話は短く、簡潔に
- よく聞き、よく話しましょう
- アイデアを繋ぎ合わせてみましょう
- 愚痴や不平を言う「ガス抜き」の場ではありません



## ワールドカフェの手順

- Round 1**  
テーマについて話し合う
- Round 2**  
アイデアを他花受粉する  
各テーブルに一名のホストを残し、他のメンバーは旅人として別のテーブルへ移動します。
- Round 3**  
テーマを掘り下げて、さらに話し合う
- Round 4**  
気づきや発見を統合する  
旅人は最初のテーブルに戻ります。
- 全体セッション**  
集合的な発見を収穫する

14:00 ~

Round

1

START

テーマ 1: 鑑賞によって  
育まれる力とは何でしょうか?

**会** 場全体へ向けて、まず1つ目の対話のテーマが共有されます。各テーブルのメンバーは、前日のグループワークとは異なるよう構成されていたため、まずは自己紹介をします。あるグループでは、前日に自身が取り組んだグループワークがどのようなものだったかを他のメンバーに紹介しながら、テーマに関する意見を述べている場面も見られました。模造紙には大きくテーマやキーワードが書き込まれていき、誰かがそのキーワードに反応すると、各テーブルは徐々に明るい雰囲気帯びるようになっていきました。

席替え

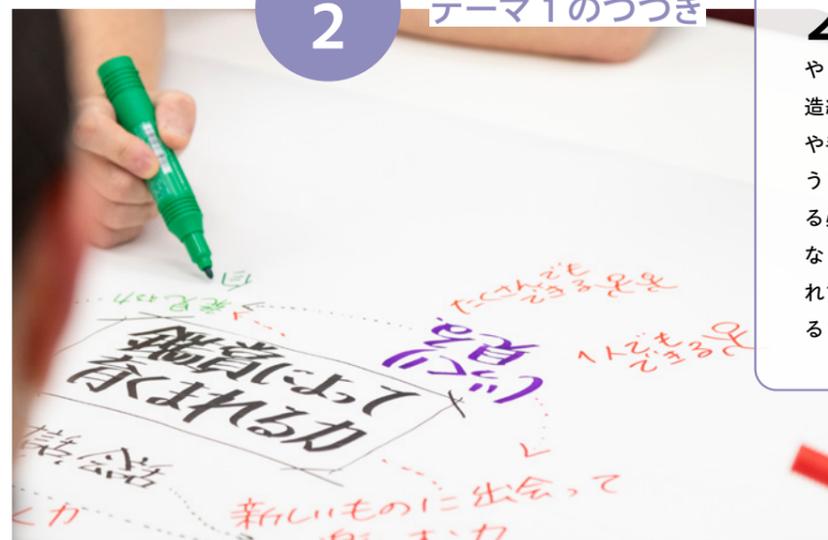
14:20 ~

Round

2

テーマ1のつづき

**20** 分が経過すると、他のテーブルへの席替えをします。唯一ホストとして残ったメンバーが、後からやってきた人へこれまでどのような話が行なわれたかを、模造紙を指しながら説明していきます。多くの会議では模造紙や手元のノートに「議事録」や「自分だけのメモ」として使うことが多いですが、このワールドカフェでは、議事録を取る必要はありません。その代わりに、小さくメモを取るのではなく、全員に見えるように大きく書くというルールが設けられています。まとまっていないアイデアでもまずは全員が見ることのできる議論のテーブルに上げていくことが大切です。



14:45 ~

Round  
3

テーマ2：すべての子どもたちが美術館や作品を通して学ぶために私たちは何をすべきでしょうか？

**今** 年度より、グループワークに特別支援学級対象のグループが設けられたように、多くの文化施設や教育現場では誰にでも学びの機会を開くための取組が行なわれています。自分の学級や施設の来館者に向けたアプローチや配慮について、ここにいる「すべての」メンバーが考えていくのです。模造紙はテーマが変わっても取り換えません。これは先のテーマで挙げたアイデアたちが思いがけず繋がる可能性を残すためです。3Round目になると、テーブルに身を乗り出しながらアイデアどうしを繋げたり、メンバーへ説明する場面も多く見られるようになりました。



15:01 ~

Round  
4

全員もとのテーブルに「おかえりなさい！」

**参** 加者たちは、Round 1のテーブルに戻ってきます。「ただいま」「おかえりなさい」という声があがります。会場全体は賑やかな様子でしたが、いくつかのテーブルでは真剣な面持ちで静かに意見を交わす場面や、考え込んで慎重にキーワードを書き込む様子も見られました。多くのアイデアや意見が出ることは、様々な素材を準備し、まな板に乗せることと似て、重要なステップ。しかしそれらをどのような料理にするかを考えるのもまた大切なプロセスともいえます。様々な意見を、目の前にあるテーマや参加者たちの様子と照らし合わせて意味づけをしていくということは、作品を前にして意見どうしを繋げながら応答していくファシリテーターの役割とも重なります。

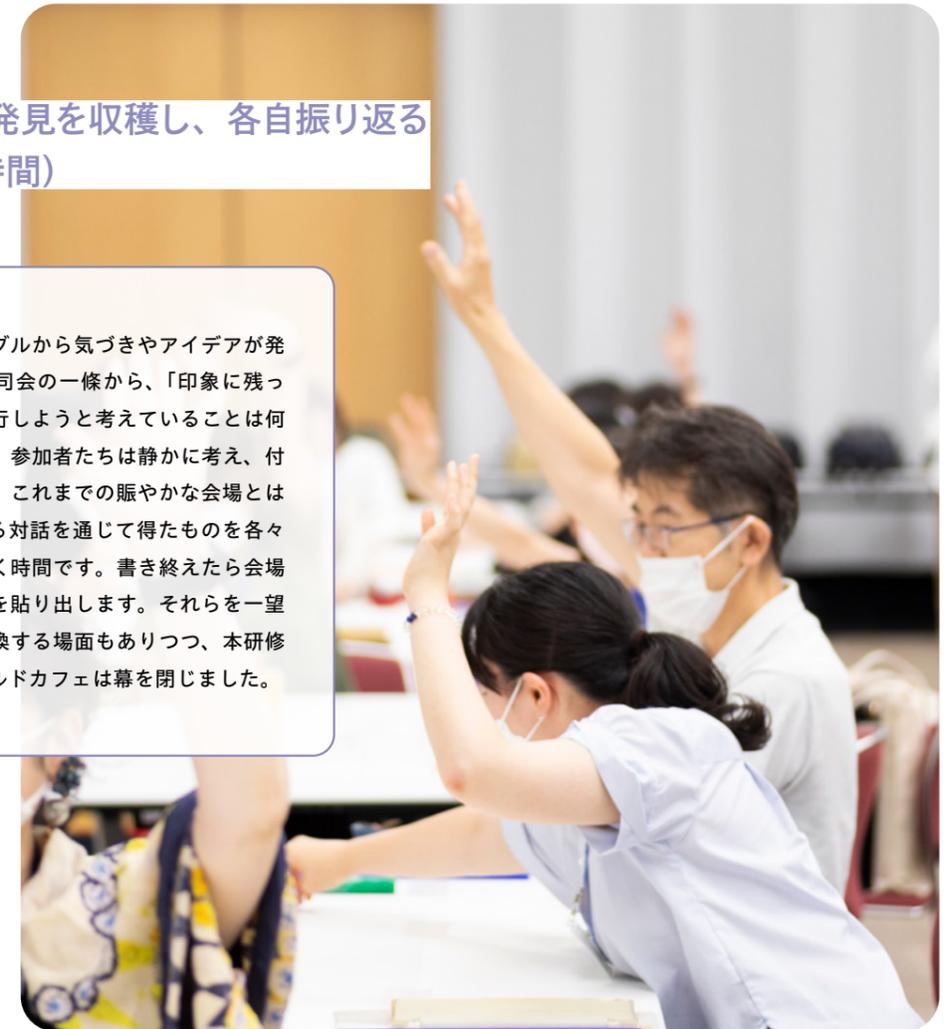


15:18 ~

5

集合的な発見を収穫し、各自振り返る（沈黙の時間）

**最** 後に、いくつかのテーブルから気づきやアイデアが発表されました。その後司会的一条から、「印象に残ったキーワード」、「研修後に実行しようと考えていることは何か」という問いかけがなされ、参加者たちは静かに考え、付箋紙に書き込んでいきました。これまでの賑やかな会場とは違って変わり、2時間にわたる対話を通じて得たものを各々が意味づけし、言語化していく時間です。書き終えたら会場内のホワイトボードに付箋紙を貼り出します。それらを一望し、参加者どうしが意見を交換する場面もありつつ、本研修最後のプログラムであるワールドカフェは幕を閉じました。





“これまで”を振り返り、  
“これから”を書く

ワールドカフェの最後、参加者全員が沈黙して研修全体を振り返りました。そして「明日から自分には何ができるだろう?」という問いについて付箋紙に書き込みました。ここに紹介しているのは、受講者が研修を通してインプットしたことを踏まえて、「これから」の行動の指針やアイデアを表明(アウトプット)するものとなっています。

先生と  
対話する。  
(先生よりこれだ、)

美術館に壁  
を感じる人が  
いないか見周  
してみる

楽しんで  
やる

鑑賞があたり  
前になるように。  
週に一回、鑑賞  
の時間を取り、  
対話する

迷いつながら  
やめたい  
(考え続けるテーマ)

美術館で  
さむいでも  
いい?  
→いい

大人も子どもも  
「自分としての価値  
をつくりだす」  
そのことの大切さを  
訴えていく。

美術館は  
いつでも Welcome!  
と、もともと伝え  
つづけていきたいです。

「鑑賞」を  
知ってもらう。  
(職員研修)

器をたぐって  
いくため  


鑑賞も  
創造活動

他者の見方を  
聴く時間  
もつくる

失敗は  
いい!

美術館に  
電話  
する!!

じっくり  
観る時間  
をつくる

美術館には  
失敗が  
ないということ。

8/8 (水) のイベント、  
どうやら、  
クリアでき  
るのかな。

鑑賞  
ようせ!!

大人も子供も  
「子どもはこれだ、  
な日々を  
送りたい!

誘導・強制  
はNG!!  
決めつけない

鑑賞のポジティブ面  
だけでなく、ネガティブ  
面にも目を向けて  
もらうように。と見  
ました。

研究会  
立ち上げ

情報の与え  
方に注意  
する (どの量を)

大人から  
変わる

鑑賞で  
育つのは  
子供だけじゃなく  
大人もそう。

先生方の  
がしりしり  
するハードルを  
さげる

美術館の  
職員  
みんなであつ  
いて

さらに観る  
時間をつくる

美術館での  
研修内容を  
自分なりに  
糸繰り上げる。

楽しんで子が  
を気づくカ  
がいる

知っているに  
ならない

対話は  
自分との  
対話ごと  
ある

受容できない  
ものにも  
ちゃんと会いに  
行く

まずは...  
TEL!

鑑賞のねらい  
を大切に、  
教材作品  
を精選する

ただし、一人で  
やるのではなく、  
仲間を巻き込み  
ながらバージョン  
アップする自分で!!

ワークシート、  
対話型鑑  
賞を実践して  
みたい!

目的に  
あった作品  
を選び

不安な先生に  
大丈夫と  
言う

子どもに合わせて  
引き出す  
準備  
する!



Leadership Training for Teachers and Curators  
to Enhance Art Museum-based Learning  
美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修

## 受講者の声



# 事後アンケート

## 研修全体の感想 ※抜粋

なぜ作品鑑賞が必要なかが自分なりに分かりました。表現も鑑賞も手段で人間形成のためにやるということがよく分かりました。それが目からウロコが落ちるような体験でした。本質を学ぶことができ本当に有意義な研修でした。ありがとうございました。(中学校教諭)

夏休み期間は忙しく、今まで、興味をあっても二の足を踏んでいたが、勇気を持って研修に参加をして本当によかった。異校種、美術館の方など立場の違う方と情報を共有することで、新たな発見、様々な視点に触れることができた。また美術の教諭だけでなく、数学、書道の先生もいらっやっていて、他教科の先生も参加できることに目から鱗であった。今後、他教科の先生や幼稚園・保育園の先生、福祉施設など、さらに他分野にわたった多くの方に参加してもらえると鑑賞教育の面白さが多くの人に広がっていくな、と思った。(高等学校教諭) ※注1

自分自身はまだまだよく分からないと感じている「対話による鑑賞」は、学校現場でもかなり普及していて、皆さん自然に実践されているのにまず驚いた。それもあって、今回の研修では、その先にある、学校と美術館の連携や、特別支援学校や病院内の子どもたちへのアプローチにも目を向けて真剣に議論する場がしばしば見られたのが印象的だった。本当に、今回共有した意見や思いが周りに伝播していくとよいと思う。この研修の同窓会などができて繋がりが維持できるとよいのではないかな。(学芸員)

こういう研修は自戒に繋がる部分が大きく、また色々な新しい仲間と出会える貴重な機会であるけれど、教員が連携を負担する難しさは常につきまとうので、行政に働きかけて、各地域に外部連携コーディネーターをぜひ配置してもらいたいなと感じます。せっかく繋がった仲間とも改めて関われる機会をつくっていききたいですし、つくっていただけたらありがたいです。(中学校教諭)

満足感と、今後の実践への責任感が生じたような気がすることへの戸惑いなどが、混在しています。大きな学びをもって、地元に戻れます。ありがとうございました。(小学校教諭)

今回の研修に思いきって参加してみてもよかったと思っています。鑑賞ってどうやればいいんだろう？というところからスタートした研修だったため、教えていただいたことの半分も吸収できたかどうか……という自分を歯がゆく思います。また数年後、もう少し実践を積んだときに、もう一度この研修を受けたいなと感じました。(小学校教諭)

美術館利用のマナーもあるんだと改めて思いました。美術館に展示してある作品たちは、結構いろんな主義主張を発信しているのに、見る方は割と窮屈ですね。でも大事なことなので、美術館に行くときは改めて押さえねば。暗黙の了解は特支の子ども達には伝わらないのでしっかり言うように気をつけようと思います。一方で、展覧会によっては違うルールがあることや美術館に相談して、利用や楽しむための配慮・工夫と一緒に考えていくことができるかも!ということもすっかり周囲の先生方にも伝えようと思います。また色々な方が視覚障害のある子ども達、利用者さんのことを考えてくれてありがたいなと感じました。私も、特別支援学校の子も達に、美術ってつくるのも見るのも楽しいよ!を伝えられるようがんばります。(特別支援学校等教諭)

鑑賞の授業の重要性は分かってはいても、なかなかできなったり、美術館に連絡しては迷惑になるのではないかな等の研修に参加する前までの思いが全てなくなりました。この研修で、学んだことをしっかりと還元できるように活動していきたいと思います。(高等学校教諭)

考えることや人と考えを分かち合うことは本来楽しいことであつたはずなのに、いつの間にか面倒になりコスバやタイバを求めて自分で勝手に忙しくしていたなと気づきました。鑑賞を深掘りすれば、豊かさとは幸せとはという哲学的な問いかけにも通じてくるのだと思います。変化の激しい時代だからこそ、自分の軸を持って生きていく、自分の価値観を必要に応じてアップデートしていく、そのために対話型鑑賞は生徒だけでなく大人にも必要で有効だと思いました。(特別支援学校等教諭)

子どもや保護者、美術以外の教科担当や、職種は異なるがどこかで協力してくれそうな人が、美術や美術館について具体的にどう考えているのを知りたいです。いわゆる「興味はあるが近づかない人」「興味がない人」のことも知りたいです。また、実施した鑑賞プログラムにおける生徒のビフォー・アフターの数値的なアンケートがあるとさらに参考になることが見つかるかと思います。(中学校教諭)

※注1 令和5年度実施要項では、「\*本研修は、図画工作や美術の鑑賞教育普及関連事業に携わった経験を有し、指導的立場にある者を対象者とする」としています。

※注2 令和5年度実施要項では、「\*すでに本研修を受講した者であっても、各都道府県及び各政令指定都市教育委員会が特に必要と認める場合は受講対象者とすることができる」としています。

基本は「アート」「美術」が「素晴らしい」「価値あるもの」と価値共有している者どうしの研修なので、情報を共有したり、深めたりできたのだが、それが必ずしも全ての人に通じるものではないのではないかと考えた。ワールドカフェでの話し合いの中で、ある学芸員さんが「美術がこれほど面白くてみんなに見に来てもらいたいのに理解してもらえない」という話が出ていたが、それこそが一般的な意見なのだと思う。鑑賞教育で学べる内容が必ずしも美術である必要性、美術館に行く必要性がどれだけあるのだろうか。よさや違いの発見や共感性、創造的な思考プロセスの学習も、必ずしもそれらから学ぶ必要性はないのではないかな。

では、何が美術館の作品だけが持つ学習価値なのかと考えたとき、それは、美術館とは公的機関が認めている作品が収蔵されており、その価値があるものとして複数の人が見に行くが、その人たち全てが(現代アートに限ってはほとんどの人が)「必ずしもその作品を素晴らしいものとして評価するわけではない」ということだ。基本、学校の教材として挙げられるもので評価されているが、その価値を否定してよい、「分からない」と大声で言ってよいものはないと思われる。ましてやそう言うことによって他の人から共感が得られるものもそうないだろう。特別支援学校の生徒達は「分からないことは恥」だと思い、取り繕うことや沈黙してしまうことが多いので、この「分からない」を大声で言える面白み。色々な見方や価値観があり、答えがない面白みを見出していくことこそが鑑賞教育ではないかと考えた。(特別支援学校等教諭)

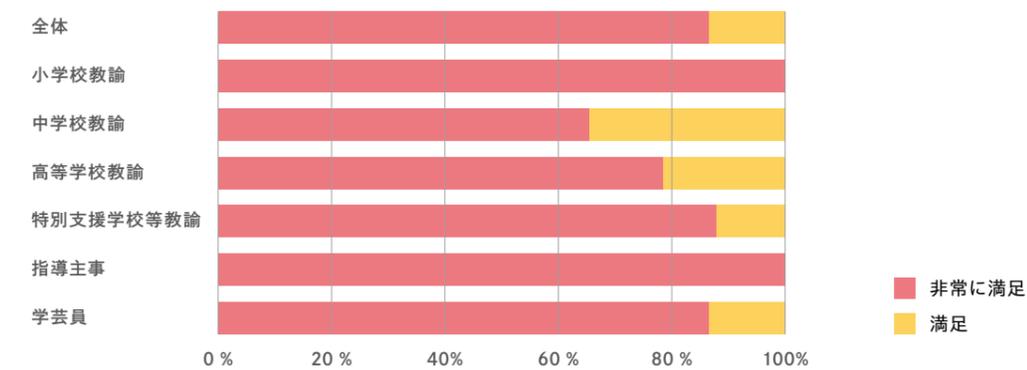
学芸員や他校種の方とたくさんお話しして、繋がりを築くことができたことがとてもよかった。美術科の先生方は学校では孤独な人が多いかもしれないので、忙しくても、研修に出るべきだと思いました。(特別支援学校等教諭)

なかなか他の職種の方と交流する場が少なく、よい機会をいただきました。学校と美術館は実は両想いなのに、コーディネートする人がいないため、すれ違っていると感じました。誰かに頼むのではなく自分たちから繋がりを求めていけるよう、動きたいと思いました。(小学校教諭)

本研修に参加するのは2回目でしたが、まだ教員になって間もない頃の1回目と、今回指導主事として参加した2回目ではそれぞれ別の発見と学びがありました。まず、今回子どもに返ったように純粋に作品を見て感動することを思い出し、改めて鑑賞って楽しい!と心から思えました。と同時に、少し授業から遠ざかっていましたが、「先生としてこう投げかけたら子どもがよく反応するのではないかな」「こんな活動を設定したら思考の流れが活発になるのではないかな」と具体的に考えることができました。そして、こんなふうに先生方がアクティブに授業を考えられるようになるにはどんな研修が必要か?美術館とどう連携したらよいか?と、作品と、研修を通して出会った様々な方達の見方・考え方に触れることによって、それぞれの立場に立って鑑賞教育を見つめ直すことができました。(指導主事) ※注2

まず教師自身がその作品に対してどれだけ見ているか考えているかがとても大切だと思いました。その作品の持つ文化的な意味や面白さなど、自分自身も様々なことに興味を持って考えていきたいと思いました。鑑賞は1つの方法が正しいということではなく、五感を使ったり様々な場所や人を活用したりと、それぞれの人に合わせて考えていく大切さを感じました。それは、決められたことをするだけではなくて、新しい価値やものを生み出す創造的なものだと思います。高等部に所属していることもあり、卒業後に必要な力という観点(就労や自立)で生徒を捉えたり目標設定することも多いと感じていますが、美術や鑑賞教育は、人が自分らしく生きること、より豊かに生きていく力をつけていける部分もあると改めて思いました。各教科の目標も大切につつ、就労という視点だけではなく、どのように経験していくのか、人生を過ごしていったほしいのかということも大切にしたいと思いました。(特別支援学校等教諭)

## 総合評価



※「ふつう」「やや不満」「不満」はいずれも0%だったため割愛

## 講演の感想 ※抜粋

理論的・知識的な面からも鑑賞教育について考えることができました。体験したことだけでは感覚のみの学びになってしまいそうですが、**講演を体験の前後に挟んでいただくことによって、知識としても学びとれた**と思います。(小学校教諭)

平田先生のお話では、学習指導要領の中に散りばめられたキーワードが具体的にはどうということなのかを分かりやすく解説していただきました。特に、**自分の考えを持たないまま対話しようとしても話が盛り上がらない**という話がありましたが、本当にその通りで、いかに前準備が大事か改めて分かりました。神野先生のお話では、デザインシンキングの思考回路をこれから自分自身に取り入れていきたいと思いますが、**もちろん、万能の思考ツールではないし、いったん答えらしきものが見つかったとしてもスクラップアンドビルドしていくものだと思いますが、行き詰まりを感じたときに希望の光が見えてきそうです**。(特別支援学校等教諭)

職場に美術のことを相談できる人はいないし、地元の教育研究会でも取組の発表が中心なので、立ち止まってしっかり考えることなく、日々の教育活動をしてしまっていたので、今ひとつ分からないところが噛み砕いて話してもらえてためになりました。知識を得て知った気になるのではなく、**なんだこれ?から始めて自分の引き出しを総動員で開け、考えたり感じたりする中で意味が見えてきたり、価値づけることができたらすごく自信になる**と思いました。(中学校教諭)

**知識がなぜ大切なのかを理論的に学びました**。自分の中でずっと悩んできたことだったので、大変有効でした。**美術の鑑賞で鍛えた力は、社会に出て自然に長く汎用されていくだろう**と思いました。相手の立場や気持ちを思いやること、ピンチをチャンスに変えるアイデアをひねり出すこと、様々な側面からものごとを捉えたり、考えを深めていこうと自分からすることが期待できると思います。(中学校教諭)

平田先生の講演では、最初に自分と美術館との出会いのお話があって、生徒にも、そのような話から鑑賞の内容に入るとよいかもしいないと思いました。そして、**他校種の学習指導要領を解説つきで見比べることができて、勉強になりました**。(高校教諭)

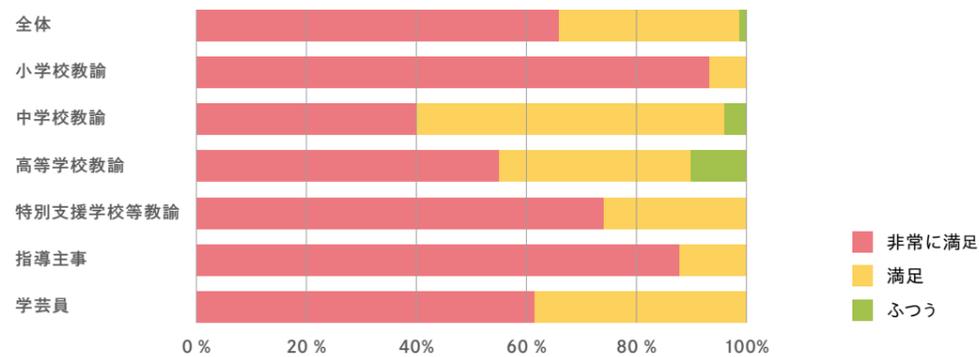
神野先生が話していた、鑑賞の意味や、**鑑賞を苦手と考えている生徒の気持ち**がとても参考になりました。(特別支援学校等教諭)

学習指導要領に沿って話してくださったので、鑑賞の時間に大切にしなければならないことがよく分かった。また、各校種の実践報告も、**すぐに実践したくなるものであった**。「鑑賞」と「art appreciation」の違いは自分にとっては初めての気づきだった。文化の学び、意味生成の学びどちらも大切だが、子どもたちが社会に出ていくのにあたり、自分にとってわけの分からないものに向き合い、自分なりのよさ、意味を見つける学び(= art appreciation) がより重要になるということが分かった。(小学校教諭)

**生徒一人ひとりに応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供する指導方法や、指導体制の構築、改善のための調整役**をしていくことが美術教師の大切な役割であることを学びました。(高校教諭)

校種別、美術館からと、鑑賞教育についての課題とねらいがよく分かりました。全部を知っておくことは鑑賞教育を進めていく上ですごく大事であると思いました。その後に実際に他校種の先生方や、美術館の学芸員さんとグループワークをしたのもよかったです。また、鑑賞に相対する二面性があるという捉え方も勉強になりました。文化的な学びと鑑賞を分けて考えることで、さらにたくさんの先生方に薦めやすくなったような気がします。なんだこれは!?!を大切にしたいです。(小学校教諭)

### 講演の満足度



## 事例紹介の感想 ※抜粋

改めて「**自分は美術を通して何をしたいのか、何ができるのか**」を考えることができました。言い訳しないで、やれることを実現していきたいと強く思えました。(中学校教諭)

**東京は恵まれてるなど率直に思った。だからといって、自分がそこにいたら実行するか、と問われれば、どうだろう**。やる気や熱意の問題だと改めて思う。21世紀を担う子どもたちのために、自分の地域でできることに尽力したい。(中学校教諭)

美術館、学校、大学、様々な立場から事例を発表していただき、勉強になりました。事例にもありましたが、元校長先生という方が美術館に関わったり、大学の教授が美術館に関わったり、**相互を繋ぐ役割を担う方がいらっしやると連携がスムーズにいくような気がします**。どの立場の方々も忙しいとは思いますが、**交流ができる時間と場所があるとよい**と思いました。(学芸員)

普段自分が仕事をしている中で、学校の先生と顔を合わせた経験が片手で数えられるほどしかないことを本当に反省した。**学校から鑑賞体験の依頼がないこと**にあぐらをかいていたのではないかと感じた。これから学校団体が来館するときは、たとえ学芸員対応の依頼がなくても、積極的に先生にあいさつさせていただくことにし、**まずは顔が見える関係を築くところから始めよう**と思う。(学芸員)

成功例だけではなく、**課題を克服している事例も見つけた**です。(学芸員)

**住んでいるところは変えられないので、地の利はなんだ?**と自分からアートさんぽをして、**見つけていきたい**。障害のある子どもたちと美術館との関わりをまた、発信していきたい。無理はなんなのか。どうすれば、**無理じゃなくなるのか、工夫する楽しさを自分もまた、味わっていきたい**。(小学校教諭)

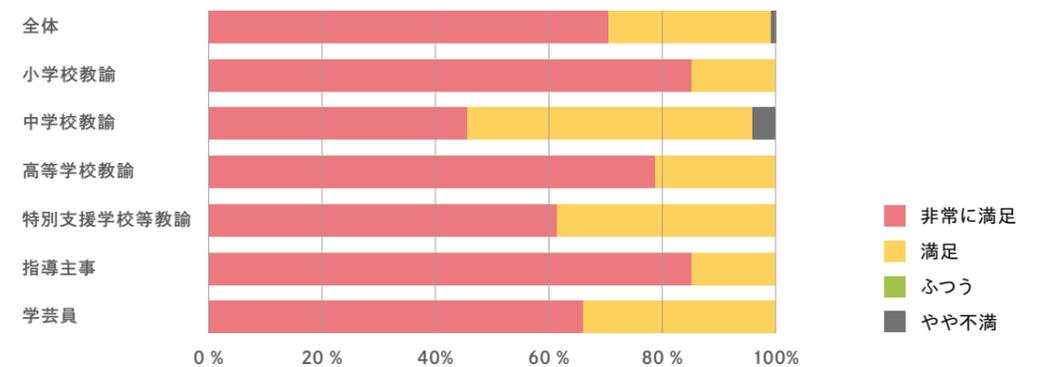
「出会いを紡ぐ」江原先生の数えきれないくらい的美術館を活用した授業実践に脱帽しました。**やりたいと思っても、学校の事情や授業時数の関係などいろいろな問題があり、なかなかできることではない**と思います。**それも飛び越えていく江原先生の美術と子どもに対する愛情が素晴らしいし、子どもたちはとても幸せだ**と感じました。私ももっと子どもと美術館をつなぐことはできないかと考え直すきっかけになりました。(指導主事)

学校の鑑賞で美術館を利用するのはハードルが高いと思います。八戸市美術館の取組はそのハードルを下げてくれたように感じます。学校と美術館双方で抱える課題の検証を行なうことで課題を共有することが大切だと感じました。また、**異なる校種の教員、学芸員などでチームをつくるメリットがある**ことが分かりました。(高等学校教諭)

徒歩圏内に美術館がたくさんあり、**小さな頃から本物の作品と触れることのできる小学生もいることを知り、都会と地方の環境の違いを感じましたが、置かれた環境でもできることがたくさんあるはずだ**と振り返ることができました。学校から生徒を美術館に引率するだけでなく、学芸員の方にオンライン講習を行っていただけることもわかりました。学校と美術館、美術と他教科、表現と鑑賞の繋がりを大切にしていきたいと改めて感じました。(高等学校教諭)

どうしても学習活動には評価がついてくると思うのですが、**紹介された鑑賞活動の評価をどのようにされたのか**、についても教えていただきかったなと感じているところです。(小学校教諭)

### 事例紹介の満足度



## ワールドカフェの感想 ※抜粋

全国各地の皆さんと直接顔を見て対話ができることはありませんし、本当によい機会をいただきました。自分がこれまで当たり前だと思ってきたことは、環境や地域が変わればそれは当たり前ではないことに気づかされ、今自分が置かれた場所で自分の仕事、役割を果たすことが大事だと考えました。(中学校教諭)

たくさんの方とお話ができ、できると思える事が広がった気がします。特に、美術館をもっと活用していいと知れた事が大きかったです。ワールドカフェのはじめより、最後は部屋の温度が上がっている気がして、皆さんの熱気が部屋の温度を上げたんだなと感じました。(高等学校教諭)

初めてワールドカフェを経験しましたが、こんなによいものだとは思いませんでした。答えは出さなくてよい、まとめなくてよい。ただただ思いをアウトプットし、共有し、広がっていく時間が心地よく感じました。この2日間の学びのあと、最後に設定していることもよいかと思えます。皆さんの思いがあふれた模造紙が熱かったです。とても心に残りましたし、この2日間の価値を改めて感じました。(学芸員)

みんなが思っているところは、枝葉は違うが元は同じだなあと感じた。愛や熱と表現されていたが、その枝葉が対話にでてくる言葉だと思う。生まれも育ちも違う人が集まり、1つのことを成し遂げる、まさにワールドだなあと、楽しくなった。自分の言葉は無駄じゃない。だれかとつながっている、と嬉しかった。(小学校教諭)

面白い研修方法だと感じた。視覚と聴覚で情報が入ってくるので話題にこと欠かないし、人の意見から自分の考えが次々出てくるのが面白かった。(特別支援学校等教諭)

非常に難しかったです。もっと意見を言いたかったのですが、批判的な内容になるのかなと感じて、何度も言うのをストップしてしまいました。(特別支援学校等教諭)

機会の均等を、鑑賞の質の問題として捉えているグループと、鑑賞するうえでのシステムの問題として捉えているグループの対比が興味深かったです。(学芸員)

最初のグループを近い地域の方々にくださっていたので、互いに連携するアイデアも出てきたのが大きな収穫でした。ワールドカフェをすることで、鑑賞指導者としての経験値や年数などが違っていても、個々に応じた気づきや学びを実感できているように感じました。最後の付箋に書いたことを共有したことがとてもよかったです。(指導主事)

とにかく楽しかった。こんな経験ができてとても嬉しい。毎週したいと思った。どんどん思考の跡が紙に蓄積されていき、離れていくようで、深まっていくことがわかった。人は自分にはない考えを持っていて貴重だなと改めて思う。意見を出し合っていくことの面白さをこれからも続けていきたい。(中学校教諭)

模造紙を使って「意見交換の旅」の足跡を残すことで、ワールドカフェがやりやすかったように思います。元の席に戻ったとき、自分のメモに追記されていると嬉しくなり、またそこから自分の考えもさらに広がっていきました。漠然と考えていたことが、しゃべりながら形になっていく感覚を味わえたと思います。限られた時間ではありましたが、自分以外の方がどのような思いで研修を受講されているのか、鑑賞についてどのように考えているのかを知ることができ、まさしく今回の2日間の「まとめ」時間であるように思いました。(学芸員)

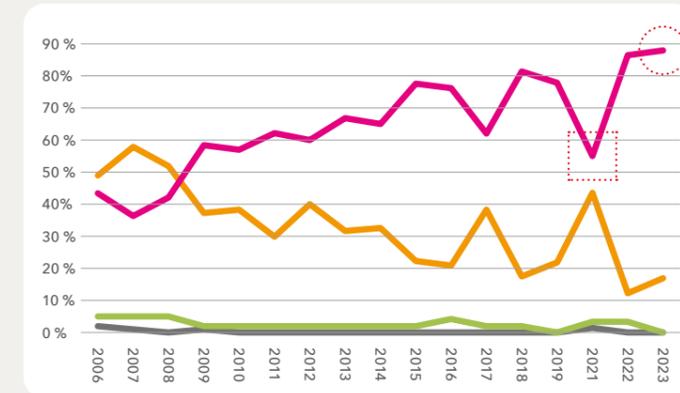
### ワールドカフェの満足度



## 過去のアンケート結果の統計

「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」は、2006年度から、毎年開催してきました(2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大のため中止するが、オンラインで「15周年記念シンポジウム」を開催)。そこで、受講者のアンケートより、これまでの研修の推移を、様々な側面からグラフでご紹介します。

### 研修全体の総合評価



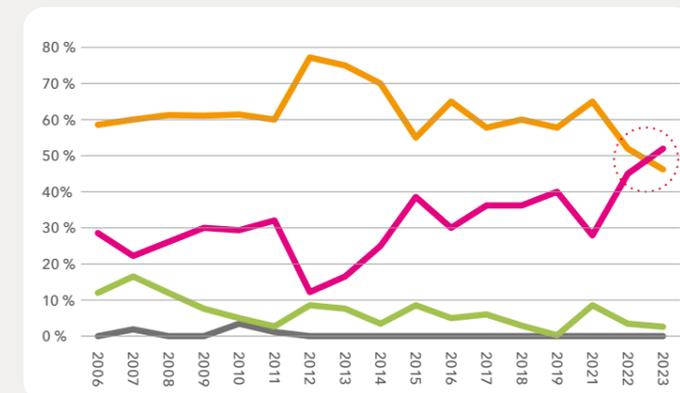
※「不満」は全年度において0%だったため割愛

### POINT

- ・2023年「非常に満足」の回答の割合が過去最高の86%でした。
- ・一時的に評価が落ち込みを見せた2021年は、コロナ禍の影響でオンライン実施となった年でした。



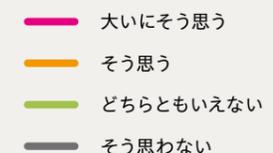
### 能力(知識・スキル)が向上した



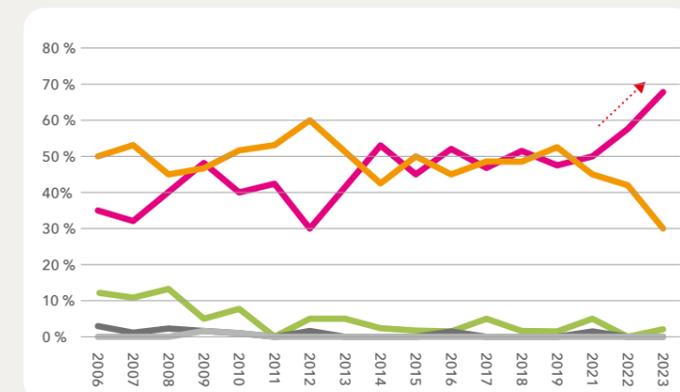
※「全く思わない」は全年度において0%だったため割愛

### POINT

- ・2023年「大いにそう思う」の割合が「そう思う」を上回りました。
- ・「大いにそう思う」の割合が初めて過半数(52%)に達しました。



### 研修内容は職場で活用できる

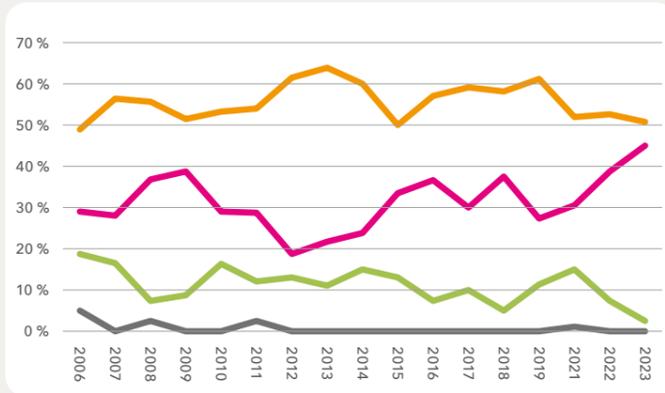


### POINT

- ・2023年「大いにそう思う」の割合が過去最高(69%)でした。
- ・2021年以降の「大いにそう思う」に増加傾向が見られました。



## 研修内容を地域の学校や美術館に広く還元できる



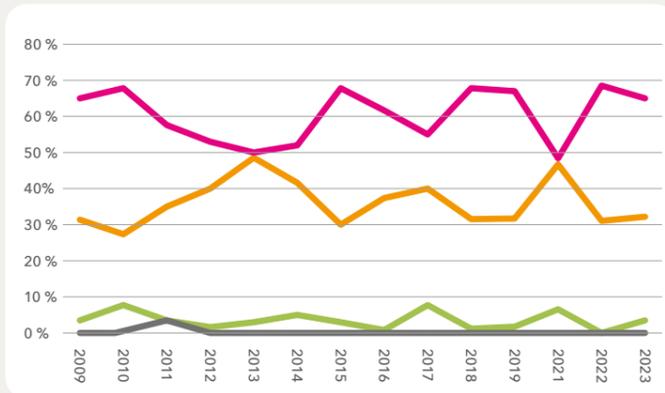
※「全くそう思わない」は全年度において0%だったため割愛

### POINT

- ・「大いに思う」は2021年以降増加傾向にあり、2023年では過去最高の45%でした。

- 大いに思う
- そう思う
- どちらともいえない
- そう思わない

## 同僚・知人にもこの研修を薦めたい



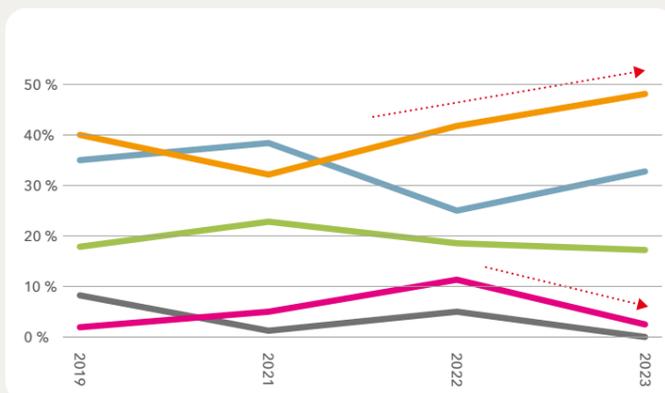
※「全くそう思わない」は全年度において0%だったため割愛

### POINT

- ・この質問項目は2009年から追加されました。
- ・2021年を除く全年度で「大いに～」は常に過半数を占めていました。

- 大いに思う
- そう思う
- どちらともいえない
- そう思わない

## あなたの地域では、本研修のような事業や、鑑賞教育が行なわれていますか？



### POINT

- ・この質問項目は2019年から追加されました。
- ・「活発に～」は2023年に落ち込んでいるものの、「行なわれている」は増加傾向にありました。

- 活発に行なわれている
- 行なわれている
- ふつう
- あまり行なわれていない
- 全く行なわれていない

※ 分析対象はいずれも全受講者の回答の割合 (%)

## おわりに



運営スタッフ一同

目の前にある作品をつぶさに観察すると、自分の中に発見や疑問が芽生えてくる。ときにはその意見を誰かに伝え、他の人の意見を聞く。そうして観察と発見を深めていくと、目の前の作品が息を吹き込まれたように色鮮やかになってくる。すると、作品のことが、作品を取り巻く背景のことが、そして隣にいる鑑賞者のことがもっと知りたくなってくる。

このプロセスのことを、われわれは「鑑賞を通じた学び」と呼んでいます。2006年度から、記念シンポジウムも含めて毎年開催してきた本研修は、そのような「鑑賞を通じた学び」をより深めたいという熱意を持つ全国の教員、学芸員、指導主事の皆さんとともに回を重ねてまいりました。今年度の研修も、その年の受講生の方々のニーズや社会の変化に合わせて、プログラムを設計し、講師の方々との打ち合わせを重ね、実施に至りました。

国立の美術館に限らず、全国にある美術館の作品は、もっとよく鑑賞され、たくさんの意味や価値を見出されることを望んでいます。そしてわれわれ国立美術館の教育普及に携わる職員は、この鑑賞という営みが、できるだけ多くの人の学びと心の豊かさに寄与することを目指し、活動を続け、知見を蓄積してきました。

今年発足した国立アトリサーチセンターのミッションは「アートをつなげる、深める、広げる」です。ラーニンググループは本研修を継承し、美術館の教育普及や学校教育に携わる方はもちろん、美術館とどのように付き合ったらいいかわからない、という方々も含め、すべての人が美術館のコレクションを通して豊かな学びに開かれていくことを目指しています。これからも、国立美術館各館と連携しながら、様々な知見を集積させ、より充実した研修を開催してまいります。

この報告冊子が、少しでも皆さまの学びに寄与できましたら幸いです。

国立アトリサーチセンター ラーニンググループ



令和5年度 美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修  
2023年8月7日(国立国際美術館)～8月8日(大阪府立国際会議場)  
主催:独立行政法人国立美術館 共催:文化庁

## 講演

### 平田 朝一\*1

文化庁 参事官(芸術文化担当)付 教科調査官(併)  
文部科学省 初等中等教育局 教育課程課 教科調査官(併)  
国立教育政策研究所 教育課程研究センター 研究開発部 教育課程調査官

### 神野 真吾\*1

千葉大学 教育学部 准教授

## 事例紹介

### 江原 貴美子

港区立筈小学校 図工専科教員

### 篠原 英里

八戸市美術館 学芸員

### 安田 真理子

八戸市美術館 学校連携コーディネーター

### 高橋 智子

静岡大学 教育学部 准教授

## ファシリテーター

### 渡邊 美香\*1

大阪教育大学 教育学部 准教授

### 吉澤 菜摘

国立新美術館 学芸課 教育普及室長

### 中根 誠一\*1

世田谷区立瀬田小学校 主任教諭

### 東良 雅人

京都市総合教育センター 副所長

### 道越 洋美\*1

藤枝市立岡部中学校 教頭

### 松永 かおり\*1

世田谷区立砧南中学校 校長

### 星 博人\*1

福島県立会津学鳳中学校・高等学校 副校長

### 亀井 幸子

徳島県立近代美術館 主席

### 松山 沙樹

京都国立近代美術館 学芸課 研究員

\*1 国立美術館の教育普及事業等に関する委員会 委員

\*2 ファシリテーター補助者

※所属は研修開催当時

## 運営スタッフ

### 一條 彰子

国立アートリサーチセンター ラーニンググループ グループリーダー

### 稲庭 彩和子\*2

国立アートリサーチセンター ラーニンググループ 主任研究員

### 鈴木 智香子\*2

国立アートリサーチセンター ラーニンググループ 研究員

### 原 泉\*2

国立アートリサーチセンター ラーニンググループ 研究員

### 小池 秀樹

国立アートリサーチセンター 研究員(情報企画・メディア担当)

### 古澤 美久

独立行政法人国立美術館 本部事務局 総務企画課 係長(研修担当)

### 花田 英子

独立行政法人国立美術館 本部事務局 総務企画課 事務補佐員(研修担当)

### 端山 聡子

東京国立近代美術館 企画課 教育普及室長

### 細谷 美宇\*2

東京国立近代美術館 企画課 研究員

### 今井 陽子\*2

国立工芸館 工芸課 教育普及室長

### 日南 日和

国立工芸館 工芸課 研究補佐員

### 横川 悠子

国立工芸館 工芸課 主査

### 松山 沙樹

京都国立近代美術館 学芸課 研究員

### 酒井 敦子\*2

国立西洋美術館 学芸課 教育普及室長

### 秋田 美緒\*2

国立西洋美術館 学芸課 研究員

### 藤吉 祐子

国立国際美術館 学芸課 教育普及室長

### 芝 涼香

国立国際美術館 学芸課 研究員

### 阿部 楓子

国立国際美術館 学芸課 研究員

### 山本 恵子

国立国際美術館 学芸課 研究補佐員

### 青山 杏子

国立国際美術館 総務課 係長(総務担当・事業担当)

### 柳原 亜佳梨

国立国際美術館 総務課 主任(事業担当)

### 吉澤 菜摘

国立新美術館 学芸課 教育普及室長

### 宮下 咲\*2

国立新美術館 学芸課 研究員

令和5年度 美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修  
報告書

## 編集・デザイン

Neki inc.

## 撮影

成田 舞

Neki inc.

堀井ヒロツグ

## 編集・執筆

原 泉

国立アートリサーチセンター ラーニンググループ 研究員

ヘメンディングー綾

## 発行

独立行政法人国立美術館 国立アートリサーチセンター

〒102-0073 東京都千代田区九段北1-13-12 北の丸スクエア2階

Tel 03-6910-0637 (ラーニンググループ 代表)

mail info.learning@artmuseums.go.jp

web https://ncar.artmuseums.go.jp/

Copyright © 2023 National Center for Art Research, Japan



Leadership Training for Teachers and Curators  
to Enhance Art Museum-based Learning  
美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修